
再殺少女ゾンビ《罪と罰》

雨月 枢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再殺少女ゾンビ《罪と罰》

【Nコード】

N6861H

【作者名】

雨月 枢

【あらすじ】

ねえ、お願い。

殺して、ボクを殺して、もう一度ボクを殺して。
ボクを再殺して。

再殺少女ゾンビ

これは愚かな嘆きの少年ノアと堕ちた儚い少女アリスの物語。

ノア、お願い。

殺して、殺して、ボクを殺して。

アリス、僕がアリスを殺してあげる。
何度も何度でも再殺してあげるよ。

そんな終末の世界のそんな終焉の物語。
キミの見る視界と、ボクの見る視界が繋がるその刻。
きっと、この視えない世界の扉が開かれる。

第一話「序・命亡クシ殺セヨ乙女」

バラバラ。

あどけない少女の顔。

小さな白い胴体。

細い両手、両足。

幼い少女が、

バラバラに為っている。

そんなバラバラ死体がひとつ。ひとつ。ひとつ。

赤い赤い、真っ赤な。

冷えたコンクリートに染み渡る鮮血。飛び散った血液。

肉、死肉、腐肉、肉の塊、肉の残骸。

ぐしゃぐしゃに、碎け散る肉片。肉塊。

そこに、バラバラになった少女がいた。

ぐしゃぐしゃになったその軀はもう元には戻らないから。

もぞもぞ、

バラバラになった肉片が。

死にかけた蟲のように、地面を這いながら。

闇に這いながら。

死した少女の屍体が蠢いている。

闇に蠢く少女。

やがて、その少女はゾンビと為る。

君は恨みと憎しみを糧に動く死体と為った。

生きる死人、生きる死者、死した屍の少女。

屍少女。少女ゾンビと為る。

だから、僕は。

罪人に為る、咎人に為る。

そんな罪を狩るもの。

再殺者になるんだ。

そして、僕は君を再び殺すしかないんだ。

再殺少女ゾンビ。

それは、君の罪と僕の罰。

そして、僕の罪と君の罰。

絡み合う罪と罰。

逃れられない運命なんだ。

お願いだから、もう黄泉返らないで。

もう君を殺したくないんだ。

再殺。

再び。殺す。

君を殺すたび、愛おしくなるから。

ねえ、お願い、もう甦らないで。

僕が殺してあげるから。

君を殺してあげる。

何度も。

何度でも。

ほら・・・。

早く、早く。

殺してよ。

ねえ。

お願い。

私を殺して。

あははは。

あははははは。

バラバラに為った少女が僕を視て嗤っていた。

ああ、僕は・・・。

君を。

君を、また殺さなきゃ・・・。

あはははは。

ああ、眩暈が。

僕は、目眩がした。

第二話「転校生」

そう僕は、こんな世界にうんざりしていたんだ。

なにもない、なにもない、僕の世界に。

嫌気が差していた。

永久に普遍だと信じていたのに。

ただとだけど、

普遍なはずの世界が、いきなり変わればどうなるのか。

僕は思い知らされる……。。

ある日、突如として、

そう、僕らの世界はある日、突然変貌したんだ。

それはいつもの日常の終わり、そして異常な日常の始まりだった。

五月蠅い蝉の声が鳴り止まないノイズになって僕の聴覚を刺激する、

そんな茹だるような暑さの夏。

うるさいな……。、

ああ、夏なんか嫌いだよ。

なんなんだろう、この暑さは、異常じゃないの？まったくさ・・・、

そう僕は夏が大嫌いだ。

なぜなら、僕は太陽が嫌いだからだ。

灼熱に照らす天空の絶対者。

それに僕には太陽は痛すぎる、輝きが強すぎるんだ。

ん・・・。そういえば、先輩も太陽が嫌いだったな。

でもまあ、先輩は、仕方がないけど・・・。

「転校生を紹介する」

そんな時、僕の通う九門学園に季節外れの転校生がやってきた。

「皆さん。はじめまして、

ボクはアリス、西園アリスです。

よろしくお願いします」

黒い制服を着た少女。

それは吸い込まれそうな黒瞳。

それは艶やかな腰まである長い黒髪。

それは妖艶で小さく真っ赤な唇。

それはまるで人形のような。

それはまるで死体のような透き通った白い肌。

そんな儚い死臭がする、死の匂いが漂う真白い少女がそこにいた。

「・・・よろしくね」

少女は小さな声で呟いた。

その声は僕には、甘い甘い吐息に聴こえた。

ふふっ・・・、

そして・・・、彼女は僕の方を見て微笑んだ。

ア、リ、ス・・・？

そう、まるで僕の心を見透したように。

うふふ・・・、

その少女は笑っていた。

まるで、死の天使アズラエルのように。

いや、云うならば、

ヨハン・ファウスト博士を惑わす悪魔、メフィストフェレスのよう
に。

うふふ・・・、

少女は、嗤っていた。

始まったんだ。

そして、僕らの異常な日常が始まろうとしていた。

終わったんだ。

そして、僕らの正常な日常が終わろうとしていた。

終わりの始まり、

始まりの終わり、

いつのかにか五月蠅い蝉の雑音が止まり、茹だるような暑さが消え
ていた。

ぞくり、

僕は肌寒さで少し震えた。

そして、僕は君から目を反らすことができなかった。

あの少女アリスの深遠の漆黒の闇の黒瞳から、瞳を反らすことなど。

僕にはできるわけがなかったんだ。

第三話「深層記憶回帰」

「じゃあ、西園は後の空いてる席に座りなさい。」

おい、雨月。

西園に教科書を見せてやるんだぞ、いいな？」

え、なんだって、きつとそれは僕の隣の席じゃないか。

当たり前か、そこしか机は空いてないんだから。

それにしても……。

綺麗な子だな。

まるで人形のような。

アリス、

西園アリス、か。

うーん。

どこかで聞いた名前だ。

アリス……。

でも、なにかが引っかかるんだ。

知ってる・・・、

僕はこの子を、

それがなんなのかはまだ分からないけど・・・。

なにか、おかしい。

もどかしい記憶の奥にわだかまっている、この感情はなんだ？

・・・恋？

これが恋なのか・・・？

これが一目惚れってもののかな？

いやいや。

いや、違うだろう、これはもっと違う感情だろう。

なにか不思議な感情・・・。

恐れ・・・恐怖？

僕が、この子に恐怖だって？

違うな・・・。

ああ、駄目だ。

もつと奥に潜らないと、僕の記憶を呼び戻さないといけない!

ガタッ、

つと、そうしているうちに、君が隣に座った。

ふわりと長い艶やかな黒髪が舞った。

甘い香りが僕の鼻腔をくすぐる。

君は夏だというのに汗ひとつかいていない、綺麗な肌をしていた。

少し、僕は見蕩れてた。ほんの少し、僕は見惚れていた。

「・・・」

「・・・」

すると君と目が合った、僕は慌てて目を反らした。

「ねえ・・・、久しぶりね」

そして君がまた微笑んだ。

「ねえ、ノア？」

少女は僕を視ていた。

「あー、えっと、

あの・・・、西園さんとどこかで会ったことあったのかな？」

僕はしどろもどろになりながら応えていた。

すると君は少し寂しげな顔をして囁いた。

「・・・そう、

キミはもう、覚えてないんだね・・・、ボクの事なんか」

「に、西園さん・・・？」

「違うよ、西園じゃない。ボクはアリスだよ？

ねえ、お願い、ボクのこと。アリスって呼んで」

僕は、上目遣いで見上げてくる君の瞳に吸い寄せられそうになる。

「う、うん。ごめん・・・。

・・・ア、アリス」

「・・・うん。なあに？ノア」

「・・・アリス」

僕はもう一度、その名を呼んだ。

「そっだよ、ノア」

記憶。

遙か昔の記憶。

遙か昔といたって、僕がまだ少し小さい、幼少の頃の記憶。

それは、僕がまだ小学生だった。

それは失くした記憶。

いや、失くそうとした記憶なのかもしれない。

記憶の中の記憶。

深い蟠っていた記憶の奥。

深い深い奥底の記憶。

深層記憶。

微かな、ほんの微かな記憶を頼りに、僕は深く深く深層に潜っていた。

記憶回廊。

まどろんだ記憶の中。

過去の思い出が復元される。

記憶回帰。

そこは暗い暗い闇の中。

しくしく、

小さなひとりの少女が泣いていた。

しくしく、

それは人形のような少女。

助けて。

泣いている君がいた。

助けて。

君が泣いている。

助けて、ノ・・・ア。

ノア。

泣き叫んでいる君がそこにいた。

だけど、その手は赤く、紅く、真っ赤に血塗れていた。

ねえ、

お願い、ノア。

ボクを殺して。

そして、血塗れたまま少女は微笑んでいた。

暗転。フラッシュバック。

そこで、僕の記憶が暗転する。

記憶還元。

くっ・・・、うつ・・・、

頭蓋を絞められるようにギシギシと頭痛がする。

胸を掻き毟るように吐気がする。

はあはあはあ・・・、

ああ、眩暈がする。

・・・ノア、・・・ノア、

誰かが僕を呼ぶ声が聞こえる。

その甘い声に導かれるように、

やがて目の前の世界は、狭い教室に戻っていた。

「ノア、ノア！・・・ねえ、ノア。大丈夫？」

その間、ずっと僕をその黒い瞳で心配そうに見つめる君がいた。

「・・・ん？」

ああ。・・・ああ、だ、大丈夫だよ。アリス」

「・・・そう、良かった」

僕の顔を心配そうに除き見る少女。

「そうか。」

思い出したよ、アリス・・・。

・・・少し、君の事を思い出したよ」

「え、ほんと？」

ボクのこと思い出したの？嬉しい・・・」

「ねえ、アリス。」

・・・君は、あのアリスなんだね？」

「・・・そうだよ。」

ボクはボク。アリスだよ、ノア」

「うん・・・、アリス」

僕とアリスは見詰め合った。

そう、かつての幼なじみ。

そう、かつての少女。

そう、かつて僕が好きだった君。

そう、かつて神隠しに遭った少女。

そして、僕の前から居なくなった。いや、僕の前から忽然と消え去った君。

神隠しの少女、アリス。

だから僕は記憶を消した。いや、消そうとしたんだ。

忌々しい禍々しい過去から。

アリスの名前も、存在自体も。

忘れたかったから、忘れ去りたかったんだ。

あの頃の僕には耐えられなかったんだろう。そう、まだ小さい少年には

重すぎたのだ。

あの日の、あの事件の、あの事象、あの記憶、あの世界、

だから、無意識に、唯識に。

君の記憶を閉じ込めた、アリスの記憶を閉鎖したんだ。

そして、僕の目の前にアリスがいる。

あの頃となにも変わらぬ人形のような少女。

「ただいま、ノア」

真っ赤な紅い赤い唇で囁きながら。

そして、あの時と変わらずに君は、血塗れた少女は微笑んでいた。

「おかえり、アリス」

ああ、僕は眩暈がした。

だけど、その時の僕はちゃんと笑えていたのだろうか。

ねえ、アリス。

僕はあの時、泣いていなかったかい？

そして、僕は運命の少女、西園アリスと再会したんだ。

第四話「幻想幻影少女」

アリス。

ねえ、アリス。

ああ、まただ。

またボクの頭の中にいつもの幻聴が響いていた。

寒い、寒いよ・・・。

すでに季節は夏なのにボクの体は異様に冷たくて寒いんだ。

ボクは生まれたての羊のようにぶるぶると震えていた。

アリス。

ねえ、アリス。

喉が乾いたのでしょ？

そして、いつもの幻聴がボクに語り掛けてくる。

違う、違うよ。

喉なんて渴いてなんかない。

あら、そう。

・・・そんなの嘘よ。

そんなの嘘、だってワタシも飢えてるもの。

こんなに・・・。

ごくりとアリスの喉になる。

違う、違う違う。

飢えてないよ・・・、飢えてなんかない・・・。

・・・ごくり。

ね。ほら、欲しいんでしょ？

ねえ、アリス。

欲しいんでしょ・・・。

いやいや・・・、欲しくない、そんなの欲しくなんかない。

ごくりっ。

そう。だったらどうして、そんなに喉の渇きがなくならないの？

ごくっ。

乾いて・・・なんかない・・・。

ねえ、欲しいんでしょ。

違う・・・。

この血が。

あの温かい血が。

飲みたいんでしょ？

ごくりつ。

・・・血。

真っ赤で甘く錆付いた・・・。

ボクは血なんか飲みたくないよ・・・。

そう。

あら、いいの？

このままならアナタはアナタでなくなるのよ？

それでもいいの？アリス。

それに・・・。ほら、憧れのカレにも逢えなくなるのよ。

カレにやっとなえたのでしょ？

ああ、彼．．．にも、

ノア。

雨月ノア．．．。

そうよ、もう彼。ノアに逢えなくてもいいの？

イヤ。

嫌嫌。

厭厭厭。

それだけは嫌．．．。

また逢えなくなるなんて、そんなの厭だよ．．．。

せっかく逢えたのに。

だったら、ほら、

飲みなさい．．．．。

うつ、

うつ．．．。

あ、ああっ．．．．。

そうしていつも幻聴がボクを惑わすんだ。

夢魔インキュバスのように、淫魔サキュバスのように。

ボクを魅了する、魅惑するんだ。

毎日毎日毎日、毎晩毎晩毎晩のように。

やだ。やめて、やめて。

アリス。

やだよ。

さあ、アリス。

やだやだ。

ワタシを出すのよ、アナタの中から。

解放して。

やめてやめて。

解放して。

ワタシの名を呼んで。

解放放つのよ。

さあ、アリス。

この世界を、アナタの望むままにしてあげるから。

ワタシの名を云うのよ。

アナタは・・・。

リ・・・、リリス。

ボクは・・・。

そう、ボクは、ワタシは、リリス。

「ボクは・・・リリス」

いつの間にか体の震えは止まっていた。

そして、ボクの意識が消えるその時。

鏡に映ったもうひとりの少女リリスは、闇に落ちた墮天使のように、

にやりとボクを嘲笑っていた。

あはは。

いい子ね、アナタは。

さあ、逝きましょう。アリス。

ワタシと一緒に《謝^{カーニバル}肉祭》に。

マンションの自室のベランダから、微笑みの闇少女リリスが見上げたその月は、赤く紅く、まるで血のように真っ赤に染まっていた。

アリスの頬を流れる雫が、そんな月灯りに照らされて、赤く染まっていた。

それはまるで、少女が流す血の涙のように見えた。

ねえ、ノア。

これで良かったんだよね。

だって、キミに逢いたかったから。

こうするしかなかったの。

僕にはこうするほかなかったんだよ。

ねえ、ノア。

お願いだから、ボクを許して。

僕のノア。

僕だけのノア。

もう誰にも渡さないよ。

第五話「再殺者」

塵は塵に、灰は灰に、死には死を、

黒衣の男は、そう呟きながら、崩れ落ちた少女の屍を踏み潰した。

ぐしゃり。

少し、街の外れにある、とある公園。

【三崎公園】

グシャ。

バラバラになった少女の死体。否、初めから死体だった少女の死体。

グシャ、グシャリ。

黒衣の男は、ブーツの下で少女の死骸を踏み潰していた。

「さてと。

これで、再殺完了つと。

じゃあな、成仏しなよ。お嬢ちゃん」

男はそう言つと、啜えた煙草を少女の死体に落した。

ぼとり。

その途端。

少女の死体から炎が燃え上がった。

轟。

そして、辺りにも散らばっていた数十体もの屍骸も一斉に燃え出した。

「ナンマイダ。さよーなら」

轟轟と。

煉獄の業火に焼かれる少女たち。

死人を一瞬で焼き尽くしたその炎は、まるで鬼火のように青く蒼く燃えていた。

少女を燃やした黒衣の男、その瞳も青く蒼く耀いていた。

死骸を睨みながら。

青く蒼く爛々と。

【再殺者】

死者、死人、屍を再び殺すことが出来る者たち。

異端者、異能者、断罪者、死者を狩る者。

罪を狩る者。

彼らを、【再殺者】と呼ぶ。

そして、その【再殺者】のひとりである、この黒衣の男。

彼の名は、犬塚アギト。

身長は170、体重は40、痩せている。

短いボサボサの金髪、耳には、幾つもの銀のピアス、腕には銀のブレスレット、指には、銀色の指輪、首には、銀のネックレス。

いくつものアクセサリが、チャラチャラと音を鳴らしている。

年齢は二十歳。

その瞳は青く、ギラギラと。まるで猛獣のよう、野獣のような目をしている。

犬塚アギトは、【再殺部隊】の《吉番隊》と呼ばれる【再殺者】である。

通称、鬼火のアギト。

犬塚アギトは、屍殲滅組織【東条機関】の対屍用特殊殲滅部隊【再殺部隊】に所属する《獵犬》である。

死人を狩る猟犬、屍少女を殲滅する走狗。

《猟犬》の通り名は、“鬼火”

ピピピピ。

黒衣の男の携帯が鳴る。

『ハイハイつと、

はい、なんですか？隊長』

『いま、機関の諜報班より情報があつた。

近く。奴らの儀式である《謝肉祭^{カーニバル}》がある。

諜報部の朽木が、奴らの支部がある場所を掴んだらしい、今からその場

所を携帯に送信するから。

至急、そこに向かってくれ。では、頼んだぞ。犬塚』

携帯の向こうの【隊長】と呼ばれた男の声は幽鬼のように暗く沈んでいる。

「はいはい。

ほお、朽木のおっちゃんもやるじゃねえか。

へえ、カーニバルねえ……」

にやりと犬塚アギトは笑っていた。

《カーニバル謝肉祭》

例の【教団】による祭祀なのだそうだ。

死者の祭典、死人の宴、屍の儀式とも呼ばれている。

教団の熱狂的な狂信者たちが集う祭祀儀式。

ツー、ツー。

通話は切られていた。

「ち、ちよっ・・・、おい。」

チッ、

・・・くそっ、あのヤロー切りやがった」

ピピピピ。

そして、また携帯が鳴った。

「あ？・・・つたく、なんだよ？」

まだ用があんのか？隊長さんよお」

「ああ。すまん。」

あと、云い忘れていたが、

奴らのその支部の中に【教団】の幹部がいるようだ。

心して《再殺》にかかれ、分かったな？犬塚。

我々に失敗は許されん』

『ハイハイ。

分かりましたよ。殺ればいーんだろ、《再殺》を』

『ふむ。・・・それと、そちらにもうひとり【再殺者】を向かわせた。

お前の事だから、仲間内でくれぐれも余計な面倒を起こすなよ？

・・・じゃあな、検討を祈る』

ピッ、返事もしないまま通話は切られた。

「・・・ちっ」

くそっ、何が検討を祈るだ、つんとに、人遣いの荒いやローだ、全く。

それにしても、俺だけじゃねえのかよ、つたく。

俺は知らねえぞ、どうなっても。

【再殺者】は孤高なんだよ。仲間なんかいらねえ。

それにな・・・。

これじゃ、殺戮して、殲滅する楽しみがねえじゃねえか。

かかかつ。

さーて。

これで漸く【教団】も動き出した見てえだな。

ここんとこ最近、ただの屍だけじゃつまらねえと思っていたところなんだよな。

くくくつ。

【カーニバル謝肉祭】か、なんだか面白くなってきたようだな。

カーニバルねえ。

教団の幹部。

屍の姫君か。

待ってたぜ。

にやりと、犬歯を剥き出して嘲笑する【再殺者】犬塚アギトの瞳は蒼く耀いていた。

その背後では、いつまでも青く蒼い炎、鬼火がゆらゆらと燃えていた。

東条機関【再殺部隊】所属の【再殺者】《鬼火のアギト》

そつ、奴らを再殺するのはこの俺なんだから、誰にも邪魔はさせねー。

ぎりっ、

握り締めた拳から炎が宿る。

「くくくっ」

死人を葬る青い炎、死者を送る蒼い炎。

まるで狩りを愉しむ獵犬のように。

揺ら揺らと鬼火が嗤った。

待ってるよ・・・、サクヤ。

もうすぐだからな・・・、ああ。もうすぐだ。

サクヤ。

待ってる、お兄ちゃんもお前のそばにいくからな。

第六話「双子の屍姫」

嗚呼、嗚呼・・・。

あああああああつ。

あああああああああつ。

少女が啼いている。

傷付いた、翼を筆られた小鳥のように鳴いている。

否。

少女の声は、甘く甘美に、淫靡に、泣き喘いでいる。

少し街の外れにある、とある教会。

そこは仄暗い闇。

数本の蠟燭の灯り。

少女たちが暗闇の中、もぞもぞと蠢いている。

淫らに抱き合っている少女たち。

ああ。

喘ぎが聞こえる。

ああ、

ああ、足りない、足りないの。

少女の喘ぎ声が教会に響く。

もっと、もっと、欲しいの。

血を頂戴。

チヨウダイ・・・。

あああああああああああつ。

ぴちゃぴちゃ。

はあ、はあ、

舐め合う少女の舌が妖しく蠢いている。

ぴちゃぴちゃ。

ああっ・・・。

何かを舐める音がする。

少女たちは抱き合ったまま、舐め合っている。

赤い、紅い、真っ赤な血を、お互いに舐めあっている。

互いが互いを貪りあって。求め合っている。

嗚呼、嗚呼……。

ぴちゃぴちゃ。

嗚呼、嗚呼……。

少女の赤い唇から滴る血潮を、もうひとりの少女はいやらしく蠢く赤い舌で舐め取っている。

少女の小さな手には、どろりと赤い色の付いた銀色の鋭利なナイフ。

ずぶつ。

ずぶ……。

少しずつ、小さなその身体を切り刻む。

ぴちゃぴちゃ。

抱き合った少女の足元には、血溜まり。

まるでそれは血の沼のようだ。

ふたりの少女の白いドレスは真っ赤に染まっていた。

すでに教会の中は、錆びた鉄臭い、甘い甘い血の匂いが充満している。

「ああ、ノエル……」

「ああ、ノイン……」

少女は、まったく同じ顔をしていた。

同じ声、同じ身体、

一卵性双生児、双子の少女。

だが、一つだけ違うとすれば、眼帯をしている部分が違う。

そう、双子の少女たちは、右目と左目にそれぞれ白い眼帯をしている。

合わせ鏡のように、鏡の国に迷い込んだ双子の少女。

そして、彼女たちは、死人、死者、屍、と呼ばれる少女なのだ。

屍の少女。

少女ゾンビ。

件の【教団】の屍少女。

大災厄《魔震》後に現れた新興宗教団体【孔雀教団】

【教団】に存在するという特別な十二人の屍少女。

十二使徒。

あるいは、そう十二死徒、十二屍徒とも。

そして。屍少女の上位種たる彼女たち少女は。

畏怖の名を込めて、こう呼ばれている。

屍の姫君。

シカハネヒメ
【屍姫】と。

《十二屍徒》の双子の屍姫。

右目に眼帯をしている少女。

【双児宮】 玄き死の片翼《玄姫》 黒曜ノイン。

左目に眼帯をしている少女。

【双児宮】 冥き死の片翼《冥姫》 黒曜ノエル。

十二死徒。

または、ソディアック《屍帯十二宮》と呼ばれる《屍の領域》のひとつ。
【双児宮】ジエニを司る屍姫である。

妖しく蠢く身体を離しながら、双子の少女は呟く。

「ねえ、ノイル」

「なあに、ノエル」

「そろそろ、カーニバルが始まるのじゃなくて？」

「そうね、始まるわね。【謝肉祭】^{カーニバル}が・・・うふふ」

ノインの血の着いた舌を舐めながら、ノエルが囁く。

「だったら、他の子たちも集まるのかしら？」

「さあ、どうかしらね・・・」

「あの子たち皆、気まぐれだから」

「ふふ、それもそうね」

ふたりの少女は妖しく微笑む。

「それに・・・、

【謝肉祭】^{カーニバル}には、薄汚い犬も寄ってくるみたいよ。

そう、血の匂いに呼び出された薄汚いハイエナのように・・・、
ね！..」

突然、双子の少女は、その手に持ったナイフを暗闇に向けて投げた。

闇の中に消えるナイフ。

「ほら・・・、出てきたらどうなの？」

二対の死者、二体の死人、二人の屍少女。

双子の屍姫は、ナイフが消えたその闇を、じっと濁った瞳で凝視していた。

「ほう・・・、さすがは【屍姫】ですね。

私の気配を読みましたか」

その闇の中から、声が聞こえた。

闇の中に気配を消していた存在、新たな配役、登場者、舞台の来場者、

果たして、それは生贄なのか。狩人なのか。

嗚呼、

嗚呼、

少女が啼いている。

「ああ・・・、

ああ、美味しそう」

「ああ・・・、

さあ、頂きましょう」

ぴちゃぴちゃ、

隻眼の双子の少女が。

あはは、あはは、

うふふ、うふふ、

合せ鏡の双子の屍姫が。

血の付いたお互いの舌を、
ぺろりと舐め合いながら、妖しく艶しく
嗤っていた。

呪われた屍の少女たち。

双子の屍姫の隻眼の瞳は、
黒壇の闇のように深遠に暗く暗く濁って
いた。

第七話「狂剣士」

街の外れにひっそりとある教会。

《遠坂教会》

闇の中で、気配が動いた。

先ほどまで存在していなかった闇の空間に、突如現れた人影。

黒のスーツに黒のコートを着た、黒衣の青年。

「ほう・・・さすがは、屍姫。

私の気配を読みましたか。」

蠟燭に浮き上がったその美貌の顔。だが、その両目は閉じたまま。

教団の十二死徒。《屍帯十二宮》ソディアック 双子の屍姫。

《双児宮》シニミ 玄き死の片翼《玄姫》 黒曜ノエル。

《双児宮》シニミ 冥き死の片翼《冥姫》 黒曜ノイン。

合わせ鏡のように、少女は囁く。

「・・・あら、

意外と恥かしがり屋さんなのですね、汚らしい飼犬さん」

「・・・さあ、

隠れていないで、早く出てきなさいな、薄汚い獵犬さん」

『そう、私たちの怨敵、再殺者のニンゲンの狗』

暗闇から気配が少女に近づいていく。

「流石ですね・・・、もうバレているのですか。

私が獵犬、再殺部隊だということを」

「だって、そんなに臭いニンゲンなんて、狗しかいないじゃない？」

「それに、美味しそうなニンゲンは、もっと甘い甘い血の匂いがするのよ？」

うふふ。

天使のように双子の少女は微笑む。

『ねえ、・・・再殺者。六道スザク』

同じ声、同じ顔で微笑む、合わせ鏡の屍姫。

「・・・ほう、

そこまで、知られているのですか、私も有名になったものですね」

「それに、いまどき古臭い刀を持っている獵犬もアナタぐらいですわ。」

「なるほど・・・」

両目を閉じたままの静かなる美貌の青年、

屍殲滅組織、東条機関、再殺部隊。

《再殺者》六道スザク。

「ならば・・・」

スザクは、腰の刀を握り絞め、呟いた。

「私のもうひとつの名、二つ名をご存知かな？」

「あら・・・もう一つの名前ですって？」

ノインが人形のように首を傾げる。

「そうね・・・何かしら？」

ノエルが人形のように首を傾げた。

「では、教えてやろう・・・」

スザクは、刀を握ったまま、腰を落とす。

「狂え啼け、夜刀姫^{ヤトヒメ}」

怨怨怨怨怨・・・。

スザクの持つ《妖斬妖刀》夜刀姫^{ヤトヒメ}が啼いている。

怨。

チン……。

一瞬、刀のツバの音が聞こえた。

微動たりとも、スザクは動いていない。

「……え、今、何か？ しまったの？」

「ああ、

少し……、君を斬ったのだが……」

「あら、私を斬ったの？ ……いつ？
不思議そうに首をかしげる少女。

「つい、……先ほど」

トン、とスザクが片足を鳴らした。

ズル、

ズルリ、

「あ……え、……な、なに？」

少女は訳が分からぬ顔をしている。

少女の半身がずるりと、ズレている。

ズル、

「・・・ノ、ノエル？」

少女の身体は丁度、胸の辺り、上下斜めにずれていった。

「ああ、すまない。

云い忘れたが、・・・さっきは、五回ほど、斬ったのだが・・・」

「・・・ノイン？」

屍姫、黒曜ノインの白い両手両足に、紅い筋が入る。

「無骸流抜刀術、飛燕^{ヒエン}」

先ほどの、微動だにしなかったスザクの刀を持った姿勢から、なんと5回も抜刀したというのか、あの一瞬で。

なんとという抜刀なのか、恐るべき無骸流の抜刀術、飛燕^{ヒエン}。

はたして、これが再殺者の力なのか、スザクの技量なのかは、今はまだ分からないが。

少女は両手、両足が落ち、バラバラになる。

ことん、とまるで人形のように倒れた少女、黒曜ノイン。

真つ二つになり、両手両足が斬られた少女の身体からは、真つ赤な血が溢れ、どくどくと洪水のように垂れ流されていた。

血溜まりの中、バラバラになった少女にスザクは呟く。

「・・・教えてやろう、

死^{シケルイ}狂。

死（屍）さえ狂わすもの。

私は再殺者、狂剣士。死狂の六道スザク」

再殺部隊。

再殺者。

死^{シケルイ}狂。

武士道は、死狂い為り、（武士道は死に狂いである）

死狂のスザク。

死人をも葬る霊刀、妖斬妖刀《夜刀姫^{ヤトヒメ}》を操る狂気の刀使い。

盲目の狂剣士。

「・・・どうした？屍姫。」

流石のお前たちの再生力でも、この霊刀で斬られれば、なかなか治らないだろう？」

狂剣士スザクはにやりと笑う。

ぐちゅぐちゅ、

「ああっ・・・」

もぞもぞ、

「痛いわ・・・」

バラバラになった少女の身体が蠢いている。

「ふふ・・・さすがだわ・・・再殺者」

上半身の顔だけになっても尚、微笑む屍姫ノイン。

ぴちゃぴちゃ、

「ああ、美味しいわ・・・ノイン」

もうひとりの屍姫ノエルは、先ほどのノインの血を手ですくって舐めている。

「ふふ、ノイン。あなたは少しそこで見ていなさい。

私がこの殿方のお相手をしますわ」

「ええ。・・・じゃあ、お願い、ね、・・・ノエル」
もはや顔だけの屍人形が妖しく微笑む。

屍姫、黒曜ノエルは、赤い口元から血を舐め取りながら、妖しく微笑んだ。

少女のその白い手には、巨大で無骨な大鋏が握られていた。

まるで少女には似合わない、異様な大鋏。

「・・・化物には化物を、か・・・いいだろう」

両目を閉じたままスザクが呟いた。

彼の開かない両目。そう、スザクは盲目なのだ、盲目の剣士なのだ。

その閉じた瞳の奥に何を視るのか、それは救済なのか、そして破壊なのか、それとも・・・虚無なのか。

「灰は灰に、塵は塵に、死には死を」

再殺者であり、盲目の狂剣士である死狂の六道スザクはその言葉を呪文のようにそっと呟き霊刀、夜刀姫を握り締めた。

「それでは、再殺を始めようか」

第八話「悪夢の続き」

力。

力だ。

破壊の力。

揺ぎ無い破壊の力。

もっと、力がいる。

もっと、俺に力を。

死者を噛み千切る鋭い牙が。

死人を噛み砕く頑丈な顎が。

屍を切り裂く鋭利な爪が。

少女を焼き尽くす煉獄の炎が。

そんな強大な破壊の力が欲しい。

俺にはまだ足りない、まだまだ足りないんだ。

今のままじゃ、隊長にも。

いや、あいつ。スザクにも届かないだろう・・・。

屍。

生きる屍。

死せる少女。

少女ゾンビ。

それに、そう、あいつらを殲滅する力が。

俺には足りない。

屍を。

屍姫を。

もつとだ、もつと俺に力を。

そうすればあの時・・・。

くそっ・・・、もつと俺に力があれば・・・、あの時、救えたはずなんだ。

あの時・・・。

写真。

男の隣で笑っている可憐な少女。

少女の名は、犬塚サクヤ。

美しい少女。

犬塚アギトの妹である。

愛する妹だった。

「お兄ちゃん、アギトお兄ちゃん」

なあ、サクヤ、お前を救えなかった俺を許してくれ。

「ねえ・・・もういいんだよ、私のことは」

なあ、許してくれ。

「・・・じゃあ、どうして私を見殺しにしたの？」

突如。

天使のようなサクヤの顔が、歪に歪んでいった。

「・・・ねえ、お兄ちゃん」

天使のサクヤが悪魔に、死人に、死者に、屍少女に為っていた。

「・・・サ、サクヤ」

俺はこの手で、青い蒼い炎の手で……。

「ア、ギ、ト……。お、兄、ち、や、ん……。」

最愛の妹の首を掴んでいた。

「は、あ……。はあ、ああ……。」

今にも折れそうな白くて細いその首を。

ぎりぎりぎり。

「……。お兄ちゃん、お願い」

「サクヤ」

「そのまま、……。私を、殺して」

俺の最愛の妹、犬塚サクヤの顔はそれでも、泣きながら微笑んでいた。

ゴキリ。

暗転。

「があああああ．．．！！！！」

屍殲滅組織東条機関《再殺部隊》の宿舎に絶叫が木霊する。

はあ、はあ、はあ．．くそっ、またあの夢かよっ！！

ガッツ、握った拳を壁に叩きつけた。

チツ、少し眠ったみてーだな。

あれから殆ど毎日見る悪夢。

犬塚アギトの目の下には、もはや消えないドス黒い隈が出来ていた。

そう、あの日の、あの時から。

消えない悪夢。消せない悪夢を。

ずっと悪夢を見続けない為、彼はずっと寝なかった。いや、厳密には、浅い眠り、つまり、レム睡眠しかとらなかった。とれなかったのだ。

そして、彼は常に慢性的な不眠症に陥っている。

そう、《再殺者》犬塚アギトは、悪夢の狂気に獲り憑かれていた。

「あー、くそっ……」

復讐。

そう、力だ。

破壊、殲滅、滅殺。

奴らを再殺する力。

そうだ、奴らを殲滅する為に、俺は再殺部隊に入った。

そして、この蒼い浄化の炎である《鬼火》の力。

鬼火。

再殺の能力に目覚めて。

俺は再殺者となった。

今では、妹を殺した屍を抹殺する為に、再殺する為だけに、俺は生きています。

復讐を糧に、死人を贄に、屍を生贄に。

俺は、ニンゲンを捨てて狗に為ったんだ。

屍を狩る猟犬に。

全てを燃やし尽くす炎の咎狗に。

「なあ……、サクヤ。待ってるよ……。必ず、俺が……」

ギリツ、犬歯を軋ませ。

ギロリと狂気の瞳を虚空に向けながら。

鬼火のアギトは、ぐしゃり、と微笑ましく写っている兄妹の写真を握り閉めた。

ああ、眠いなあ、つたく。

復讐の戦鬼と化した猟犬は、ひとつ大きな欠伸をした。

インターリユード 01

光は闇に、闇は影に、

僕らはどこまでいくのだろうか。

闇の中で、這いながら、僕は君を探している。

ねえ、アリス。

君は、どこに向かっているの？

闇の中で、蹲りながら、僕は君を呼んでいる。

君が見えない。君が聞こえない。君が分からない。

なにも。分からない。

光は影と、影は闇と、

僕らはどこまでいかなければいけないのかな。

なにも。感じない。

闇の中で、もがきながら、僕は君を追いかけている。

ねえ、アリス。

君は、どこにいるんだい？

君を感じない。

君を感じないよ。

ねえ、いったい君は、どこにいるんだい？

君を見つけるから。

君を探し出すから。

闇は闇に。

影は影に。

だけど。僕はちゃんと笑っていられるのかな？

ねえ、アリス。

僕は道化に。

僕はちゃんと君の道化でいられてるかな？

ねえ、アリス。

君はどうしてそんなに泣いているの？

そんなに悲しい？

そんなに哀しい？

ねえ、どうして？

教えてよ。

教えて。

こうして・・・僕が。

僕が泣いているから？

きっと、僕は。

君を笑わせられない泣き虫な道化師なんだよ。

光は消えて。

光は途絶えて。

光は無くなる。

ねえ、アリス。

ほら、笑ってよ？

ねえ、お願い・・・、笑って。

もう一度。君の笑顔が見たいんだ。

もう一度。

もう一度。

笑って。

第九話「調査報告」

過去。

かつてこの都市に災厄が降りかかった。

十数年前になる。

日本の霊的中心地と言われた、この都市。

神の戸、神の門、霊都神戸。

この《霊都》神戸に大震災が起こったのだ。

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分52秒。

淡路島北部を震源として発生したマグニチュード7.3の兵庫県南部地震は、淡路島ならびに阪神間の兵庫県を中心に大きな被害をもたらした。特に、神戸市市街地は壊滅状態に陥った。

死者7780名、行方不明者8000名、負傷者98980名、公的な記録にはそう記されているが、行方不明者は数万人に上ると言われる。

人々は畏怖と恐怖を込めて、阪神大震災を大災厄《魔震》と呼んだ。

それ以降。ここは魔都《神戸》と呼ばれるようになった。

地震は数週間も続き、辺り一面はまさに阿鼻叫喚、地獄絵図そのものだった。

大災厄により事実上、神戸は完全に麻痺し壊滅した。

霊都神戸と呼ばれたこの都市は機能を失い崩壊したのだ。

そう、まるで地獄の蓋が開いたように。

この世界に、異界の門が開いたのだ。

大災害、大災厄、大怪異。

《魔震》

そんな中、震災復興中に、怪異が続発した。

《怪異》

怪異その一、

《蝕》

余震が続く一週間、太陽は消えて、暗黒の太陽が現れた。
蝕と呼ばれる月食、日食が続き。朝も昼も夜も、この都市に光が

さすことはなかった。まさしく世界は、暗黒と化した。

怪異その二、

《血の雨》

突然、赤い真つ赤な雨が降ってきた。

数日間、赤い雨が降り続いた。

赤い赤い血のような雨、まるで狂った女神が涙を流したかのように。

赤い雨。血の雨ブラッドレインと呼ぶ。

怪異その三、

《謎の獣》

神戸市街地に。

まるで大型の獣に、噛み切られた、喰い千切られた死体、惨殺体が相次いで発見された。

怪異その四、

《神隠し》

数百、数千という少女が行方不明になった、少女のみ突然居なくなつたのだ。

そう、少女が忽然と消えてしまった。

まるで、神隠しに遭ったかのように。

怪異その五、

《バラバラ肢体》

数百と言う少女の手足がバラバラになって発見された。

それら手足は、行方不明中の少女の手足だった。
しかし、顔や胴体などは見つかっていない。

怪異その六、

《屍》

家族は皆、悲しみ、死亡と認定され葬式を挙げている最中。

忽然と消えた少女は突然、自宅に返ったきたのだ。

ただし、異界より戻った少女たちは、ニンゲンではなかった。

少女らは、肉を喰らい、血を啜る化物に成り果てていた。

不老不死の骸を持ち。

生きる死者、生きる死人となっていた。

異界より、地獄より、冥界より、甦った少女。

黄泉返りの少女。

少女に起こる奇跡か、いや、絶望の現象か、

そして、そんな彼女たちを、人々は。

《屍少女》、あるいは、《少女ゾンビ》と呼んだ。

少女ゾンビが蔓延る世界に変貌した異界。

異界に世界が侵されたのだ。

やがて、都市は、妖気に包まれ、狂気に感染され、死気に侵蝕されていった。

気付けば、かつての霊都は、渾沌の魔都と化していた。

怪異が跳梁跋扈する魔都《神戸》

だが、絶望ばかりではなく。

屍少女が現れたと同時に、その屍少女を狩る者も現れた。

それは人々の願い、奇跡の救世主なのか、絶望の救世主なのか。

彼らは、再殺者と呼ばれる者。

人外の力を持ったモノ。

化物を狩る化物。

罪を狩りし者たち。

屍を刈る咎狗。

死したモノを、再び殺せるモノ、屍の再殺。それが再殺者であった。

やがて、屍殲滅組織《東条機関》により、再殺者は対屍殲滅部隊《再殺部隊》に組織された。

そして、魔震後から十数年間。

屍と再殺部隊の殲滅戦は今尚も続いている。

なお。

屍少女の上位種である《屍姫》たるモノの存在が発見された。

屍少女のように狂っておらず、屍姫は頭脳や人格は正常（異常？）で、しかも、個々に特殊能力を持つ屍だと云うのだ。

現在では少数の十二体確認されているが、数こそ少ないものの、かなり危険な存在だとされる。

最強たる最凶なる最狂な最高の十二体の屍姫。

《十二屍徒》と言い、《屍帯十二宮》^{ソディアック}と呼ばれる《屍の領域》たる《十二の死宮》が在るとされる。

また、大災厄《魔震》後。

突如として、妖しげな宗教《孔雀教》

新興宗教団体《孔雀教団》が誕生している。

若年層のカリスマであり、恐るべき美貌の男。^{ブファウ}孔雀が孔雀教の教主である。

現在でも神戸を中心に、女子小、中、高、大学生の少女を中心に絶大な信仰が広まっており、信者は数万人いるとされる。

教団には、神隠し事件やバラバラ事件にも関与されているとされるが未だに証拠はない。

また、教団では、熱狂的な狂信者による《謝肉祭》^{カーニヴァル}と呼ばれる異様な祭祀儀式が毎年開かれているという、

この教団には、例の《黒魔術結社》が絡んでいると噂される・・・。

《魔術協会》との確執もある為、なかなか情報が浮かんでこないのだが・・・。

現在調査中である。

調査報告書。

屍穢滅組織東条機関再殺部隊諜報班 班長 朽木ヤクモ

カチカチ、とノートパソコンのキーボードを打ち終わり、口に啜えた煙草に火をつける。

「ふう……。ざっと資料は、こんなものかね」

男は、数十束にもなる、作り上げたその資料を眺める。

キーワードは……。

謎の宗教《孔雀教》の発生。

神戸に広がるカルト教団《孔雀教団》の存在。

殺戮祭《^{カーニバル}謝肉祭》の儀式。

屍少女。

忌み呪う死する少女である屍姫。

十二人の屍姫。《十二屍徒》

屍の領域《^{ソディアック}屍帯十二宮》

禁忌の禁断の魔道書^{グリモワール}。

大災厄《魔震》の発生。

《魔震》の影響により、具現する異界の門^{ゲート}。

神戸に蔓延る怪異。

闇に蠢く黒魔術結社と対立する魔術協会。

そして、屍殲滅組織《東条機関》の存在。

そして我々、《再殺部隊》と再殺者の存在。

ふむ、孔雀教団ねえ、・・・奴ら。屍の巣窟か。

カーニヴァル。屍の儀式に、・・・それに、例の黒魔術結社の存在か・・・。

はあ、忙しくなるなあ。

こりゃあ、相当。奥に潜らないと難しいかもな・・・。

うむ。

すでに何人か諜報班を教団内部に潜らせてはいるが・・・。未だ連

絡はない、か。

こりゃかなりヤバイのかも知れないな。

俺が行くか？行くのか。……行かなきゃなあ……。

はあ、でもな。

ここは、流石に諜報班の班長である俺が行かなきゃいけないよなあ。

今ここには、再殺部隊の犬塚や六道もいなことだし……。

『朽木。教団の情報を頼んだぞ……。いいな、分かったな？』

『……あいあいさー』

朽木ヤクモは、その極秘ファイルのデータを再殺部隊隊長《戦鬼》九十九マダラの携帯に転送した。

「これでよしっ、と」

あーあ。

でもほんと、人使いが荒いよな、隊長は。

嫌になるよ、まったく……。

今度絶対、奢って貰おう。よし、決めた。

とは云ったものの、あの隊長に振り返ちにされる気がするよ……。
はあ。

ぶつぶつと。癖のある頭髪をぼりぼりと掻きながら、朽木ヤクモは
ぼやいている。

「仕方ない。

じゃ、そろそろ、俺も探りに行くとしますか。

さて、と……。どこまで潜れるか分からないが。

この俺、《沈黙》の腕の見せ所だな。

ひとまず、《潜行》^{ダイヴ}開始だ……。」

そう呟くと、ぼつ、と、朽木ヤクモの姿が霞みだした。

再殺者。

朽木ヤクモ。

再殺部隊諜報班班長。

通称《沈黙》のヤクモ。

空間に《潜行》^{ダイヴ}する能力を持つ再殺者である。

朽木ヤクモは音を立てずに煙草の煙だけを残してその場から、忽然と消え去った。

そう、まるで空気中に溶け込むように、霞のように消えたのだ。

そこにはもう音も。気配も、存在さえも消えていた。

朽木ヤクモは、ただ静かに、どこまでも、深く深く潜っていった。

残るは、静寂。そして、沈黙が訪れた。

第十話「迷宮図書館」

九門学園の放課後。

慌しくバタバタと生徒が帰って行く。

そんな中、教室に残っている、二人の生徒。

「掃除手伝ってくれて、サンキューな、雨月」

「ん？・・ああ、いいよ。」

どうせ僕は放課後に用事があるからね」

「え、用事ってなんだ？」

「あー、うん。」

生徒会長に呼ばれてるんだ・・・」

「うへえ・・・マジかよ？」

驚愕の顔をしている友人、鳥口君。

「そっだよ、あの魔女と呼ばれる生徒会長様にね」

そして、くすりと僕は笑った。

「そりゃ、ご愁傷様でございます・・・」

手を合わせて僕に向かって拝み出す鳥口君。

「大丈夫、大丈夫だよ。」

・・・僕は別になにもされないさ」

「え、嘘だろ？」

誰もが恐れる学園一の美貌と知識を持つ生徒会長にして、冷酷な魔女と恐れられる。天才少女、草薙リンネなんだぞ？」

「うん、大丈夫。先輩は良い人だから」

「うへえ、アレが良い人ねえ・・・」

まあ、お前は変わっているからな、似たもの同士かもな」

「あのね、鳥口君。」

僕は別に、変わってなんかいないよ？」

「まあ、そういうことにしとくよ。」

・・・じゃあな、雨月、魔女に捕って喰われないようになー」

ははは、と笑いながら、

手をひらひらふり、そして鳥口君は教室を後にした。

「うーん。」

変わってるのかな？僕って・・・それに先輩も」

僕は手を顎に当てながら少し考えた。

魔女。草薙リンネ。

九門学園の生徒会長。

神戸一を誇る、草薙財閥のご令嬢。

お金持ちで、秀才で、美人で。

そして、なにより。僕の先輩でもある。

先輩は、昔から、僕の姉のような人だから。

僕にとって先輩は、なんでも相談できる唯一の人なんだ。

それに、密かに僕の憧れの人だし、たぶん、先輩は僕のことなんか気にも留めてはいないのだろうけどさ。

「・・・さてと」

椅子から立ち上がり。

「先輩が待ってる、図書館に行かなくちゃ」

図書館？

なぜ図書館、と不思議がってると思うけど。

生徒会長だから、生徒会室ではなく、図書館なんだ。

そう、図書室ではなく、この学園には図書館があるんだ。

兎に角、彼女が居る場所は、図書館しか在り得ないのだから。

先輩の数ある通り名のひとつ、文学少女。

先輩は、文学好きで、書痴で、活字中毒で、とにかく本の蟲なんだ。

いつも分厚い本を持ち歩いているし、いつも本を読んでいる。

先輩が本を読んでいないのを誰も見たことがないくらいに。

魔女の伝説その1。

草薙財閥の力で、学園内に図書館を建ててしまった。

そりゃ、本が好きな僕としても、学校に図書館あれば嬉しいけど、
なにもそこまでしなくてもいいんじゃないかって、思うときもある。

けど、先輩は違う。

欲しいものは手に入れる、いらないものは排除する。
そこにないものは作れば良いし、進むべき道に障害があれば破壊すれば良い、
というそういう考えの持ち主なんだ。

あるいは、迷宮図書館の主。

図書館の最深部に存在する特別室、そこに先輩がいる。

「うーん。

先輩のところまで、迷わないで行けるのかな・・・、ああ、不安だ」

そして、学園の図書館は、世界中のあらゆる本が収納させていて、
館内はあまりにも複雑な為、別名。迷宮図書館と呼ばれている。

はあ。

僕は溜息をついた。

まったく。先輩・・・どうしてこんなモノ、建てたんですか。

ああ。また眩暈がする・・・。

第十一話「黒猫の憂鬱」

昏刻、逢魔ヶ時。

広がる空は赤く紅く、夕日が沈む。

夕暮れの仄暗い道に、少女と黒猫がいた。

少女は黒猫の後を、とことこと歩いている。

「ねえ、ナイア。まだなの？」

不思議なことに少女は、黒猫に話しかけている。

ナイアと呼ばれた黒猫は、鬱陶しそうに少女を見上げる。

「・・・まだだっっていたでしょ？」

やれやれ、といった感じに黒猫は尻尾を下げた。

「ナイア？ほんとに、ここであってるのー？」

少女は黒猫を睨む。

「もー、君は。

なんなんだよ、失礼だなー！」

魔術協会随一の上位人造精霊であるこの僕、
ナイア・ラ・トテップをなんだと思ってるんだい？」

少女は云う。

「え、……ただの喋るネコ」

「……ああ、そう。」

それにさ、魔術協会の頼みじゃなかったら、君なんかの使い魔になんかならないんだよ？わかる？」

「んー、分かんない」

そう云うと少女は、黒猫を抱きあげていた。

「……ああ、そうですか、まったく、もー」

はあ、と溜息をつく使い魔の黒猫ナイアラ。

「つくづく思うんだけど、……ほんとに、君は、あの魔術一族の血を引いているの？」

「知らない、ナコトわかんないもん」

少女は黒猫の肉球をぷにぷに触っている。

「はあ、頭痛い……」

えーと、申し遅れました。

僕は、ナイアラ・トテップ。

僕は猫の姿をしているけど、こう見えて、ホームンクルス人造精霊なんです。

僕の創造主であり、マスターである魔術協会一の錬金術師ヘルメス・パラケルスス様より生まれし、ホムンクルス人造精霊。

それが僕です、はい。

協会でも、僕の他に、ホムンクルス上位人造精霊は数体しかいないんですよ？すごいでしょ。

そして、この愛らしい人形のような金髪碧眼のゴスロリ少女は。

ナコト・トート・クロウリー

魔術協会に所属する魔女なんだ。

今は協会の密命を受けて、僕はこの子、ナコトの使い魔をしているんだけど、決して好きでナコトの使い魔をしているんじゃないから、そこところを分かってほしいんだけど……。

「あはは」

ぷにぷに。

「あははは、可愛いー、ナイア」

ぷにぷに。

「はあ……」

でも、こう見えて、ナコトの魔力は協会でも指折りで、魔術協会に

存在する上位魔術師の称号である七色の魔術師《虹の賢者》の一人でもあるんだ。

彼女は、《黒色》の魔術師の称号を持つ魔女。

《黒き森の魔女》ナコト。

「えへへ」

にへら、と微笑んでいるその顔はまさに天使そのもの。

「……………はあ、頭痛いよ、ほんと」

まあ、ようするに僕は、ナコトのお守、いや、お目付け役なんだよ。

そして、僕とナコトの協会の密命は、教団に存在する魔道書を封印すること、あるいは消去することなんだ。

世界に存在するあらゆる魔道書。グリモワール

教団に存在するという十二冊の禁忌の魔道書。グリモワール

それが僕らに下された使命なんだ、

「あ、ナイア。見えてきたよ。大っきな建物が」

「ほらね？合ってたでしょ？」

僕らの目の前には、学園が見えていた。

そして、九門学園に見える巨大な図書館が僕らの行き先なんだ。

「迷宮図書館か、久しぶりだなあ」

「ねー、リンネに逢えるんだね、ナイア」

「うん、そうだね、ナコト」

「えへへ、ナコト嬉しいー」

僕らは、はるばる倫敦から。

そう、僕らの仲間逢いにきたんだ、あの迷宮図書館に住む白き魔女に。

草薙リンネに逢いに来たんだ。

元魔術協会の上位魔術師。七色の魔術師《虹の賢者》のひとりにして、

《白色》の魔術師の称号を持つ魔女。

《白き月の魔女》 草薙リンネ。

それに、彼女程の味方がいれば心強い。

「・・・でも、少々厄介なのは厄介だな・・・」

僕は、ぽりぽりとアゴヒゲを撫でる。

「んー、どうしたのナイア？」

僕を覗き込む少女ナコト。

「いくら、協会の密命だからって、彼女は、そんなこと聞くようなヒトじゃないからねー……」

「それに、協会から称号を剥奪された魔女だからなー」

「……ん？ナコト？」

少女がいない……あれ？さっきまでそこにいたのに。

「……って、いつてるうちから、先にいくなー!!」

「ねー、早くー、おいでよー」

見上げると少女が駆け足で図書館に向かっている。

「はあ、頭が痛いよ……、トホホ」

僕は溜息をついた。

「さて、僕も行くか」

だって、あの少女が迷宮図書館で迷うのは目に見えていたから。

第十二話「アルビノの少女」

しくしく。

しくしく。

薄暗い廊下で少女が泣いている。

金髪碧眼の人形のような少女。

「……ん？」

そこに現れた少年は、座り込んだ少女に話しかけた。

「ねえ、どうしたの？」

しくしく。

まだ泣き止まない黒いゴスロリ少女。

「ねえ、君、大丈夫？、ねえ、迷ったの？」

「……う……ん」

「そっか、じゃあ、君は、ひとり？」

「ううん。ナイアといたの、けど、はぐれちゃったの」

「そっか、君は、ここの生徒じゃないよね？」

「・・・うん」

しくしく。

また泣き出した黒い少女。

「ねえ、大丈夫だから、そんなに泣かないで？」

「・・・大丈夫？」

「うん、僕が連れて行ってあげるから、一緒に、その友達を探そう？」

「・・・え、探してくれるの？・・・アナタはだれなの？」

「あ、ごめん。」

僕は雨月ノア、ここの学園二年生だよ、君は？」

「・・・アマツキノア、・・・ノア、いいなまえ」

「そうかな、・・・でも。うん、ありがとう」

「ワタシはナコト、ナコトだよ、ノア」

「ナコトちゃんか、可愛い名前だね」

「そうなの、可愛い名前なの」

えへへ。

「ほら、初めて笑ったね、泣いた顔より、その笑った顔のほうが可愛いよ？ナコトちゃん」

「もー」

少し照れた少女は愛玩人形のように、えへへと笑った。

ここは、そう。九門学園の敷地に在る図書館の中。

各階には幾つもの廊下があり、その廊下の先の部屋ごとに本棚が並べられ、廊下のその中心には、いくつもの地下に伸びる螺旋階段がある。

そう、迷宮なのだ。

本の迷宮。

まるで迷宮のように入り組んでいることから、ここは《迷宮図書館》と呼ばれている。

この金髪碧眼の少女は。

魔術協会の魔術師、ナコト・トート・クロウリー

協会の誇る七人の魔術師、七色の称号。虹の賢者のひとり、黒色の魔術師。またの名を、黒き森の魔女と呼ばれる、協会に所属する魔術師なのだ。

にゃー。

廊下の隅から黒猫が現れた。

「あ、ナイア？、ナイアこっちだよ」

にゃあ（もう、勝手にいかないでよ、ナコト）

「うん、ごめんね」

「え、猫？、友達って猫だったの？」

「うん、私の友達なの」

「そっか、じゃ良かったね」

「うん」

「ところで、この図書館になんの用なの？」

「ナコトはね、リンネに逢いにきたの」

「へえ、先輩に。知り会いな？ナコトちゃん、」

「うん、知り合いなの」

にゃあ。

黒猫は自分もそうだと云うふうに鳴いた。

「あはは、そっか、君もか。」

あ、そうだ、僕も用があるから、良かつたら一緒にいくかい？」

「うん、いくー、ノアと一緒にいくの」

少女は愛らしい笑顔で僕に抱きついてくる。

えへへ。

少年に抱きつき、顔をすりすりするつけている少女。

少年は少し照れながら、困っている。

・・・。

その光景を、黒猫はずっと見ていた、このノアと言う少年を。

この少年に、ほんのわずかな微量な魔力の欠片を感じたからだ。

魔力と呼べるほどではないが、闇気、魔気、死気、狂気とでも言おうか、ただの人間なのに。

ホムンクルス

人造精霊は、使い魔と呼ばれるが故に、猫目。その黄色の瞳には、魔力感知回路が仕込まれている。

黒猫ナイアール・トテップの瞳に映る少年は、なにかがおかしい、なにか不思議な気を漂わせている。

ただし、ホムンクルスである僕には、そこまでしか分からなかった。

だけど、ナコトがこんなに懐くのは珍しい、人嫌いなこの少女がこ

んなにニンゲンになつくわけがないのに。

「ナイアどうしたの？」

少女が顔を覗き込んできた。

にゃあ（ん、いや、なんでもないよ）。

少年は、少女と手を繋いだまま、迷宮図書館の奥へと進んでいる。

地下へ地下へと螺旋階段が続いている。

僕らはいったい何階分下りたのだろうか。

ぐるぐるぐる。

ぐるぐるぐる。

僕は眩暈が起きそうになるのを必死に我慢する。

「ぐるぐるなのー、眼がぐるぐるするの」

少女はふらふらになっていたから、僕はそっと抱き上げてあげた。

「ひあっ、……ノア？」

「ん？、ナコトちゃんが辛そうだったから、僕が抱っこしてあげるよ」

「……うん、ありがとなの」

えへへ。

僕の腕に抱えられたまま、顔を林檎のように赤くしながら微笑んでいた。

にやあ。

やれやれと言った顔で黒猫が鳴いた。

「ねー、ノア？」

「なんだい？」

「・・・ナコトは、ノアが好きなの」

「うん、ありがとう、ナコトちゃん」

「ねー、ねー、ノアは恋人とかいないの？」

「え、恋人？うーん、いないなー」

「好きな人とかは？」

「うーん、そうだな、いまはいないかな・・・」

一瞬、僕の脳裏に、アリスの笑顔がよぎったが。

どうなんだろう、今もまだ僕は君が好きなのだろうか。

君もまだあのころのように、僕のことを好きなのだろうか、好きでいてくれるのだろうか。

視線を感じて下を見ると。

じー。

少女が可愛い瞳を細めて僕を見つめていた。いや、睨んでいるのかも。

「ノア、いま誰かのことを考えてたでしょー」
頬を風船の膨らませる少女。

「あ、いや、そんなことないって」

「ほんと？」

「ほんと、ほんとだよ」

「じゃあ、ナコトがノアの恋人になってあげる。
ね、嬉しいでしょ？ノア」

「う、嬉しいよ」

そう言いながら少し照れて困った少年は頭をぽりぽり掻いている
気付けば、いつの間にか、螺旋階段が終わって、廊下の先は大きな
扉が見えた。

「おいおい、こんな処で、君たちのラブラブ具合を見せ付けるのも
いいかげんにしたまえよ」

そして、廊下から、可憐な澄み切った声が聞こえていた、その声は。

「せ、先輩・・・、どうして」

「どうしてもなにも、ここには、いくつもの監視カメラがあるんだよ、

いやはや。すべて見せてもらったよ」

「か、監視カメラ・・・、なるどほ、さすが先輩ですね・・・」

「ようやく。」

君にもようやく恋人が出来たようだね？

小さな恋人だがね・・・、ああ。それに犯罪だぞ？雨月君」

「もう、からかわないで下さいよ、先輩」

あははと、先輩は笑っていた。

拡張器からのノイズ混じりな声だけど、相変わらず先輩の声は綺麗だった。

「それより、ぼさつとしていないで、さっさと入りたまえよ」

「リンネ、リンネー、ナコトだよー」

少女が嬉しそうに飛び上がった。いた。

扉を開けると、そこには机の後の、安楽椅子に深くもたれている白

い少女がいた。

その髪は純白なまでの真白、その肌は雪のように白く透明で。

そのつぶらな瞳は、まるで血のように赤かった。

赤い瞳で、僕を見つめる先輩。

「久しぶりだね、雨月君」

先輩は、少し小さい黒縁メガネを指で上げながら、にこりと微笑んだ。

そう、先輩はアルビノなのだ。

アルビノ。

メラニンの生合成に係わる遺伝情報の欠損により、先天的にメラニンが欠乏する遺伝子疾患、ならびにその症状を伴う個体のこと。先天性白皮症、先天性色素欠乏症、白子症と呼ばれる。

アルビノの少女が呟いた。

「それに、ナコト。黒き森の魔女か。懐かしいね、かの魔女戦争以来かな」

ん、・・・魔女？

僕は聞き間違えたのか？魔女戦争ってなんだろう？

「リンネー」

そう云うや否や先輩に飛びつく少女。

にやあ。

「ん、おやおや。ナイアーラ・トテップ、君までお出ましいかい？」

にやー。

もちろん、とても鳴いたような気がした。

魔女、草薙リンネ

九門学園の生徒会長、草薙財閥のご令嬢。

この迷宮図書館の主、その特異な体により文学少女は図書館から出られないのだ。

なぜなら、先輩は日光、特に紫外線による皮膚の損傷や皮膚がんのリスクが非常に高い為、また、視覚が非常に弱く、遮光性が不十分で、光を非常に眩しく感じ、紫外線でその瞳を潰し焼きかねないのだ。

そう、先輩は日中、外に出られないのだ、そうまるで、吸血鬼のよう。

「まあ、君たちが来るとは、余程のことなのだろうね。
いやらしい協会のやりそうなことだよ、まったく」

先輩は溜息をついた。

「まあいいさ。ナコト、君はそこで待ってなさい、話は後で聞か

らね」

「はい、待ってるの」

学園内での魔女とは異名に過ぎない。

彼女は本当の意味で魔女なのだから。

かつて魔術協会所属にしていた魔術師なのだ。

虹の賢者と呼ばれる七色の魔術師のひとりであり、白色の魔術師。またの名を、白き月の魔女と呼ばれる。

学園の魔女とは名ばかりの、それが彼女の本当の異名なのだから。

「じゃ、まずは君からの用件を聞こうか、雨月君。
私にいったい何の用かな」

「・・・って呼んだのは先輩でしょ？もう」

「・・・そうだったか？すまない、このところ忙しくてな。

そうそう、君に伝えたいことがあったんだよ、重要なことを、ね」

「え、僕にですか？」

「そうだよ。・・・ああ、後木、すまない、アレをもって来てくれるかい？」

「・・・はい、お嬢様」

僕らの背後で、人影が動いた。

「わっ、いつからそこに・・・」

後木さん。

後木力ナメ。

草薙家の執事にして、先輩の良き理解者でもあり、先輩を守る鉄壁のボデーガードでもある、漆黒のスーツに身を包んだ壮年の執事。

そんな黒き執事、後木さんは、渋いオジサマとでもいうのかな、僕も憧れる素敵な人だ、ああ、先輩が羨ましいよ、ほんとに。

僕は後木さんを心で、こう呼んでいる、漆黒の執事。
黒執事と。

うんうん、まったくもって似合ってるな。素敵だ。

黒執事は優雅な姿で、数束の書類を持って机に置いた。

「お久しぶりで御座います、雨月様」

「はい、久しぶりですね、後木さん」

後木さんは、僕にも優しく微笑んでくれた。

「早速だが、その資料を見たまえ」

資料をもらった先輩は険しい顔をしていた。

「なんですか？これは」

「これは、君もよく知っている人物。」

アリス。そう、西園アリスの資料なんだよ、雨月君」

「……先輩。」

「こんな季節外れの転校生、少し、おかしいと思わないかい？」

十数年前、大災厄《魔震》後。

行方不明になった少女、怪異とされた神隠し事件。

神隠しに遭ったその少女の名は。

アリスと云う」

ア、アリス、

「そう。そして、怪異より十数年後に戻ってきた少女の名も、アリス」

黄泉返った少女、アリス、

西園アリス

資料を手に持った僕に。

眼鏡の奥の赤い瞳で、じっと見つめている先輩。

吸い込まれそうなほど、その綺麗な瞳に僕は眩暈がした。

その資料の写真には。

全身を白い包帯に包まれて、赤い赤い唇で微笑む、血塗れな少女、アリスが映っていた。

そして、先輩は眼鏡を指で押し上げながら、僕に忠告した。

「ねえ、いいかい、雨月君。

アリス、西園アリス。

彼女には気をつけたまえ。

彼女は、そう、危険なんだよ」

・・・アリス。

アリスの闇の瞳と先輩の血の瞳に見つめられ。

僕はまた眩暈がしそうだった、だけど。

黒き少女が小さい手で、僕の手をぎゅっと握ってくれていた。

冷たい冷えた部屋の中、ナコトの手はとっても、温かった。

第十三話「千里眼の少女」

放課後。

「雨月のやつ、ほんとに大丈夫か？」

知り合いだからって、なにせ、あの魔女だからなあ」

友人に掃除を手伝ってもらった帰り道、鳥口マモルは呟いた。

「九門学園の裏規則『草薙リンネには関わるな』なんて云われてるからなあ、まあ、俺は関わりたくないねえ」

「でも、彼女、すつごく美人なんだよなあ。うーん、勿体ないよなあ、アルビノってほんとに綺麗だよなあ」

とひとり妄想している鳥口君なのであった。

夕暮れ刻。

気付けば辺りは薄暗くなっていた。

「うへえ、随分、暗くなってきたなあ」

そういえば、新聞やニュースで云っていたのを思い出した。

学園都市連続殺人事件。

最近、神戸の学園都市、九門学園の周辺で、相次いで殺人事件が起こっている、というのを聞いていた。

被害者はいずれも中学、高校生が狙われているという、男女合わせて数十人の学生が犠牲になっていた。

その死体には、いずれも大型の肉食獣にでも噛まれたような、食い荒らしたような痕が残っていた。そしてその死体には血液が一滴も残されていなかったのだ。そう吸血鬼にでも遭ったかのように、血が吸い取られていたのだ。

「吸血鬼だって？　はは、まさかなあ、まあ、きつと、どこかの狂人が血でも抜いたんだろうなあ、シリアルキラーなんてそんなものだろう」

なんと能天気な鳥口君なのだろうか。

例の十数年前の怪異を忘れてはいないのだろうか。
この馬鹿者、鳥口マモル。

大災厄《魔震》後に現れた怪異。

それと今の事件とは酷似してはいないか。

惨殺された死体はバラバラではないものの、あまりにも似ている、似すぎている……。

というのに、この鳥口君は、阿呆なのだろうか、お気楽過ぎるよ、まったく困ったものだ。

さて、そういう僕は誰なのかだって？

僕は、鳥口マモル君を尾行している。否、見守っているんだ、怪異から守る為に、彼を護衛している。

僕の名前は、天乃目タケル、九門学園の三年生。

そう、生徒会執行部の副会長とは僕のことさ。

え、知らないだって？

そりゃないよ。なにせ、泣く子も黙る九門学園生徒会執行部とは僕らのことなのだからね。

我らが会長、魔女たるリンネ様が作られた組織なんだよ。

執行部には、リンネ様が自らお選びになった生徒が集められているからね、この僕もそうなのさ。

どうだい？すごいだろ？

だけど、草薙リンネの私設親衛隊なんて云う奴がいるけれど・・・。

まあ、少し合っているのかも知れないな・・・、とまあ、そんなことはどうだっていいんだ。

兎に角、彼に危険が迫っていると分かっていたから、こうして僕が出てきた訳なのさ。

この学園及び、生徒を守るのが僕ら、生徒会執行部の役目なんだよ。

では、どうしてこの鳥口マモルに危険が迫っているのを分かったのか？

それが分かるのさ、僕らには、なぜって？

それは、執行部には僕の妹がいるからさ。

九門学園二年生、天乃目チズル。

千里眼というのを知ってるかい？

千里眼。

未来視。

未来を視ることが出来る瞳。

僕ら天ノ目一族に伝わる瞳術。

そう僕の妹、チズルは少し先の未来を視ることが出来る能力、千里眼の持ち主なのさ。どうだい？すごいだろう？

その能力を引き出したのは、我らが会長である魔女リンネ様なのさ。

チズルが視たのは、教室で雨月ノアという鳥口マモル。

そして、夕暮れの公園で何者かに襲われている鳥口マモル。

そして・・・誰かが死んでいる幻視。ヴィジョン

そこで何も視えなくなつたとチズルが云うんだ。

その話を会長に報告すると。

「すまないが、至急、彼の元へ向かつてくれたまえ、天乃目君」と、云うものだから急いで僕が彼の後を着けたつていう訳なのさ。

どうしてなんだろうと。不思議に思つて、会長に理由を少し聞いたのだけど。

どうも「雨月ノアに関わつたから」と云つていたな。

まあ、僕にはよく分からないが。

たしか雨月君は会長の友人で、いたつて普通の少年にしか見えないのだけどね。うーん・・・。

ああ、いけないいけない、仕事だ仕事。

そうとは知らずに、まったく暢気なものだよ。ねえ、鳥口君。

その監視対象、鳥口マモルは、公園に入つていった。

ん、ここが例の公園か、何か遭つては遅いから、少し距離を詰めよう。

なにせ、チズルの千里眼は外れたことなど一度もないからね。

ん？

いないぞ？

さつき入っていったのに・・・。

天乃目タケルは尾行を解いて、公園に走り出した。

くそっ、・・・見失ったのか。

これが怪異なのか？

いや、どこかにいるはずだ。

「鳥口君！どこだ、どこにいるんだい？鳥口君！」

僕は少し焦った、一瞬の隙に、消えてしまったのか。

千里眼は当たってしまったのか、くそっ。

ああ、会長にどう報告すれば・・・。

その時。

ガサッ

公園の奥の森から、物音が聞こえた。

「・・・そこかー!!」

僕は急いで物音が聞こえた森の中に駆けつけた。

ぎりっ、僕の手には木刀が握り締められている。

「・・・鳥口君！いるのか！」

そして、僕が見たそこには。

死体があつた。

「ああ・・・」

そこには、ひとつの少女の死体が在つた。

首、胴、手足。

バラバラになつた少女の死体。

「うつ・・・」。

っ！・・・誰だ！」

僕は込み上げてくる吐気を我慢した、なぜなら。

目の前には、鳥口マモルを抱えた少女が立っていたからだ。

どぞっ。

少女は少年を下に落とした。

ん、鳥口君は気絶しているのか？それとも・・・

そして少女は僕を視た。

吸い込まれそうな漆黒の瞳。

無邪気に笑う少女、その笑顔の瞳の奥には深遠が広がっていた。

しなやかな黒髪は腰まで伸びて、風に揺らいている。

「アンタこそ、ダレ？」

真っ赤な血の着いた刀、真剣を僕に向けながら、セーラー服を着た少女は無邪気に問いかけてきた。

倒れている鳥口マモル、バラバラになった少女を眺めながら。

僕は、この手に持った木刀を固く固く握り締めた。

ぶるっ。

これは武者振るいか？

いや、そうじゃない。

僕の体から流れた汗が一瞬で冷えているからだ。

刻は、夕暮れ、黄昏刻。

それは、神々の黄昏^{ラゲナレク}。

そして、魑魅魍魎が跳梁跋扈する、逢魔ヶ刻。

そんな逢魔黄昏刻に、怪異が始まろうとしていた。

リンネの迷宮回廊「血」

ねえ。

私は誰なのだろう。

私という私は、いったい誰なのか。

こうして安楽椅子に座っている私は、果たして、私なのだろうか。

なら、私は誰なんだ？

この安楽椅子に座っているのは私じゃないのか。

私で在りたいのか。

私は、こんな白く透明な髪なんか要らなかったのだよ。

私はこんな赤く光る瞳など欲しくはなかったのだよ。

白い、余りにも白い、こんな硝子の肌をどれだけ憎んだのだろうか。

脆く、余りにも脆い、罅割れたこんな硝子など、触れるだけですぐにでも粉々に碎けてしまうというのに。

嗚呼。

チキチキ・・・。

私は、カッターを伸ばした、いつもの作業で、いつもの感覚で。

そう、それが、私が、唯一、安堵する瞬間。

私が私である確認作業、私が誰なのかを測定する検査作業。

チキチキ・・・。

余りにも白く細い手首に、刃の先端を押しつける。

嗚呼。

ぷっくり浮かんだ赤い液体。

嗚呼。

白い肌から流れ落ちた真紅の液体。

ぽたり。

嗚呼。

ぽたり。

嗚呼。

これだ、これなのだ。

そう、これが私なのだ。

私が私で在る唯一の存在証明。

そんな赤い瞳に映る赤い血は温かく、錆びた鉄の匂いがした。

私の瞳から流れ落ちた赤い涙は、私の頬を伝い、私の手首に落ちていった。

純白のキャンパスに赤い絵の具をぶちまけたように。

私の瞳に映る映像は、ぐらぐらと滲んでいる、淀んでいる。

私は誰なのか、私は私で在るのか、君は考えたことがあるかい？

自分の存在を、自己の意識を、自我の唯識を、無意識に。

ねえ、私も皆と同じなんだよ？

ほら、こんなに赤い血が流れてるんだよ？

だから、お願いだから。

私を、化物と呼ばないでくれないか。

私はバケモノ。フリークスじゃない。

バケモノなんかじゃないんだ。

少し、ほんの少し違うだけじゃないか、そうだろう？

なあ、君なら。

君だけは、そう思わないだろう？

ねえ、雨月君。

君だけは、違つと云つて。

私は私だと云つてくれるよね？

第十四話「呪殺血界」

学園都市の外れにひっそりと教会がある。

ここはその遠坂教会。

そこはもはや聖なる教会とは呼べない異様な状態になっていた。

漆黒の刀を構えている黒衣の青年。

両手に大きなハサミをもった血塗れの少女。

四肢を切断されたバラバラの少女。

二人の少女は全く同じ顔をしていた。

双子の屍姫にして十二死徒。《ソディアック屍帯十二宮》

右目に眼帯をしている、四肢がバラバラな少女、黒曜ノイン。

左目に眼帯をしている、大鋏を持っている少女、黒曜ノエル。

《シニミ双児宮》たる双子の屍姫。

対する、漆黒の刀を持つ、黒衣の青年。

再殺部隊式番隊の再殺者である死狂のスザク。

美麗な盲目の狂剣士。

再殺者と屍姫。

どちらが殺す側で殺される側なのか。

光と闇、ではなく、闇と闇の戦いと言ったほうがいいのかもしれない。

首だけの少女が囁く。

「……気をつけなさい、ノイン。あの黒い刀、危険よ」

そう、この屍の体がなかなか再生しないのだ、斬られただけで。

「ええ、分かっているわ、ノエル」

「どうした？来ないのか、屍姫」

「うふふ、待っていないさいな。」

貴方に地獄を見せてあげるわ」

「ああ、……地獄なら、見て来たが」

『呪殺血界』

ノエルが右目に付けた眼帯を外しながら呟いた。

「・・・むっ」

スザクは、構えを解かずに、抜刀の姿勢のまま、動かない。

『吊るされし殉教者』

少女ノエルの右の眼窩には、右目は存在しなかった。

そこには眼球さえ無かった。

その空洞の中には漆黒の闇が詰まっていたのだ。

少女の右目は、漆黒の闇そのもの。

闇の瞳でスザクを見つめる少女。

突如、その手に持った大鋏を。

ぐさ、ぐさ、

「ああ、・・・あっ」

なんと、喘ぎながら少女は鋏で自らの腕を切りはじめた。

鋏の先は、刃物でない分、余計に肌に刺さりにくいのだ。

「ああああ・・・」

ぐざり、ぐざり、と押し込めている。

「・・・なにをしている？」

怪訝な顔をするスザク。

くさくさ・・・

「ああああ、・・・あっ」

一心不乱にその身を削っている少女。

「ふふ・・・」

首だけの少女ノインが微笑む。

なんと、ほかのバラバラの体が蠢きながら、胴体のほうに引き寄せられ

ているではないか、少し、少しずつ、ずりずりと。

「・・・ん」

その光景を見ているスザクは、体に異常が起きていることに気がついた。

じわりじわりと、痛みが現れる。

「なっ・・・」

じわりじわりと、血が滲む。

「・・・なにっ!？」

それは少女が切り続けている部分とまったく同じ箇所なのだ。

「くっ・・・」

痛みが、傷が侵蝕していく、じわじわと。

ぶしゅっ

やがて、その箇所から血が噴き出してきたのだ。

「あはははっ」

狂笑する屍少女、黒曜ノエル。

「・・・血、血よ」

「・・・血だと？」

「ノエルを斬った時、貴方は私たちの血を浴びたでしょ？」
ノインが微笑みながら呟く。

「ぐっ・・・、なにっ」

刀も構えられず、スザクの体が硬直している。

「あはは。

ほら、体が云う事をきかないでしょ？」

「それが私たちの呪い。

・・・屍姫の《呪殺血界》よ」

十二屍徒《屍帯十二宮》の屍姫だけが持つという血の呪い。

《呪殺血界》

十二死徒の十二位、《冥き死の片翼・冥姫》黒曜ノエルの呪殺血界。

《吊るされし殉教者》

自らの血を媒体に、相手に傷と痛みを移植する呪い。

もちろん特殊な屍の体を持つ屍姫のみが行える呪いなのだ。

「ぐあっ・・・」

両腕から血が吹き出ている、そして次第に痛みも増していくではないか。

「そう、私が呪えば呪うほど、呪いが増幅するのよ」

屍姫ノエルの右目の眼窩。漆黒の闇には、呪いが詰まっていたのか。

瞳の空洞の闇からは、呪いが溢れて漏れ出している。

ズザクは、握った刀が落ちそうになるが、なんとか気力で握り締めている状態だ。

再殺者をも追い込む、恐るべき屍姫。

「ぐあ・・・、ぐっ」

もはやズザクの痛覚は数倍にも膨れ上がっていた。

「あはは、よく耐えられるわね、さすが再殺者かしら」

「じゃあ、そのまま、痛みに狂い、呪い死になさい、サムライさん」

「ぐっ、・・・まだだ」

「あら、まだ？ 動けるのかしら？」

少女は、その手に持った鋏を振り上げた。

ぐざぐざぐざ・・・、

「あああああっ・・・」

少女は自らの細く白い足を滅多刺しにする。

もはや、少女の体も血塗れではないか。

「ぐうっ・・・」

スザクの足も血塗れになる。

崩れ落ちそうになる体を、刀で地面に支えながら。

スザクは、まだ諦めていなかった。

「さあ、私の血を吸い、その力を見せよ。

・・・夜刀姫よ、吸うがいい!!」

なんと、スザクは血塗れの腕の中の妖刀に、自らの足を突き刺した。

怨 怨 怨・・・

妖刀が意思を持つように喜んでいるではないか。

怨。

「ぐあっ・・・、くっ、うっ・・・」

狂剣士スザク

彼は、狂っている、やはり狂っているのか。

自らの体を自らの刀で斬るとは。

スザクが、死に狂い、死狂と呼ばれる所以。

「・・・お前達が血の呪いなら、・・・私の血も再殺の力なのだ」

血には血にを。

「ぐっ、・・・この霊刀《夜刀姫》は、お前達屍の、対屍用の武器、
なのだ、よ・・・」

ぎぎぎぎ。

ぎちぎちぎち。

硬直しているはずの体が、動き出す。

チン。

刀のツバの音がした。

ごとり。

「あああっ・・・」

ノエルの細い腕が落ちた。

「なっ、まさか私の呪殺が聞かないの？」

「・・・もう一つ」

ごとり。

「あああっ・・・」

少女の両肩から先の腕が、落ちている。

「どうして？どうして私の呪いが」

「呪い返し・・・、この呪いは。」

なにもお前たちの専売特許ではないのだよ。

教えてやろう。

私たち再殺者の力も、呪いであり、

この力が、お前たち、屍への呪いなのだ」

「なんですって・・・」

両腕の無い少女ノエルが怯む。

あの屍姫が少女のように怯えていた。

「そう、だから、私たちは、お前たちを再び殺すことができる。

再殺者の呪い。

再殺という呪^{シュ}なのだよ、屍姫」

「なっ、・・・・・・・・再殺の呪ですって？」

スザクが腰を落し、構える。

「もういいだろう？」

そろそろ、終わりにしようか。

無骸流抜刀術・・・奥義・・・」

もう一度。

あの神速の抜刀技が放たれようとしていた。

屍姫ノエルを切り裂いた抜刀技が繰り出されようとしていた。

その時。

「……ん？」

歌声が聞こえた、

「……なに」

異様な声が聞こえる。

フグルウイル。

ムグルウナグ。

クトウルウ……。

ルルイエ、ルルイエ……。

ヴヴヴヴィイ……。

ウガナグラ……。

ウガナグル……。

フタング……。

イアイア、イアイア……イアアアアアアア！……！！……！！

およそ人の声帯では無理な声だろう。

呪。

呪言。

屍姫ノエルの忌まわしい呪文の音が教会に響く。

いつの間にか、屍姫ノエルの体が元に戻っていた。

その胸には、一冊の古い本。

「・・・なに！それは、・・・例の魔道書か」

盲目のスザクには見えないが。その禍々しいまでの死気がその本から感じ取れるのだ。

禁断の、禁忌の魔道書。グリモワール

この世に十二冊存在するという異界の本、暗黒の書、闇の書。

その力は凄まじく、異界の邪神から流れる魔力によってこの世にもたらされるといふ禍々しい災厄。

そして訪れる怪異。

魔道書。十二冊は、教団の十二死徒《屍帯十二宮》の十二人の屍姫が持っている。

ゴゴゴゴゴゴゴ。

轟轟轟。

突如、地鳴が起き、地面が蠢いた。

地震か。

いや、この教会だけが振動している。

ゴゴゴゴゴゴゴ。

建物の壁が鳴いている。

生物のように蠢いているではないか。

ぐちゅぐちゅぎちゅ、ぎちゃぐちやびちゃ。

そして、なんと教会内自体が器官をもった生き物のように蠢きだしたのだ。

「あははは」

双子の屍姫が笑っていた。

「残念ね。終わりよ、貴方は。」

私たち、屍姫が持つ魔道書^{グリモワール}。

私の魔道書《妖蛆の秘密》の力を見るがいいわ。

そして、そのまま妖蛆に食べられちゃいなさいな。

サムライさん」

屍姫ノインも左目の眼帯を取っていた。

その空洞には、やはり同じ、漆黒の闇が在った。

そこにもノエルと同じ、呪いだけが詰まっていた。

十二屍徒である屍姫だけが持っている血の呪い、呪殺血界。

十二死徒の十一位、黒曜ノインの特殊呪力《呪殺血界》。

《力ある背徳の獅子》。

血で染まった、一定の空間全体を変貌させる、血の呪い。

屍姫《玄き死の片翼・玄姫》黒曜ノインの血の呪い。

黒曜ノインの血が教会内部を汚染していたのだ。

そして今、教会内の空間を変貌させている。

双子の少女は、合わせ鏡の屍姫は、

最秘の魔道書までも同時に発動させたのだ。

恐るべき魔力、狂うべき屍力、禍々しい呪力。

それが死しても生きる屍姫の執念なのだろうか。

蟲蟲蟲蟲。

ぎぢぎぢぎぢ。

蛆蛆蛆蛆蛆。

うぞうぞうぞうぞ。

教会全体が、おびたしい蟲、妖蛆の群集に変貌していた。

もはや、蛆蟲の巢窟と化した教会。

ぷんと、腐臭漂う粘液の空間の中。

狂剣士、六道スザクは血塗れの満身創痍のまま、ただ眼を瞑っている。

死狂と呼ばれる再殺者は。

もはや、狂っているのか、それとも諦めているのか。

その手に握った妖刀、夜刀姫だけが。

怨怨・、と血を求めて鳴いていた。

チズルの存在証明「哀・瞳・愛」

九門学園の生徒会室の中で。

つぶらな瞳の少女、天乃目チズルは視ていた。

見る。観る。看る。視る。

あるヴィジョンを、ある未来を、ある幻視を。

過去。現在。未来。

いくつもの映像が入れ替わる、過去も未来も、混ざり合って。

まるで超高速のジェットコースターのように。

自分では選べない未来視。

千里眼。

うつ。

吐き気がした。

ああ。

目眩がした。

そんなのはいつものこと、いつもの感覚なの。

ああ、お姉様。

お姉様の為なら、私は何だって見る、たとえこの体が壊れたとしても、いいの、

だって。チズルの心はお姉様のもの、チズルの目はお姉様のもの。

チズルの瞳。この【千里眼】はお姉様の為だけに。

だから、ねえ、お姉様。

少しだけ、もう少しだけおそばにいてもいいですか？

私が壊れるまで。

私の目が視えなくなるまで。

どうか、私を存分に使って下さい。

いいんです。

それが私の存在理由なのだから。

だから。

その赤い瞳で私を視て下さい。

真っ赤な眼で私だけを見て下さい。

そして。その白い指で私に触れて下さい。

ああ、リンネ様。

私を生かして、逝かせるのは貴女だけなのです。

この瞳が潰れる程、視えなくなる程。

貴女をアイしています。

お姉さま。貴方だけを愛しているのです。

第十五話「終末を告げる獣」

「つまんない」

少年が呟いた。

「つまんない」

少年か？少女か？

中性的な容姿を持つ少年、そして、恐るべき美貌の少年である。

少年の、そのしつとりと濡れた淫靡な瞳には、視たモノを虜にする魔性の眼を持っていた。

その濡れた赤い唇は、一度開けば、辺りは濃厚な濃密な耽美な香りに包まれ、その芳香を嗅いだモノは、きつと理性をなくしてしまうだろう。

少女のような少年。

少年のような少女。

半陰陽。

アンドロギュノス
両性具有。

まさしく、それは、魔性の少年。

「ねえ、アネモネ、つまんないよ」

魔性の少年は、そばに寄り添っている美しい少女に愚痴る。

「そんなにつまらないですか？メリクリウス様」

無表情のまま少女は問う。

「あー、つまんないさ。」

だって、僕だけこんなところにいるんだよ？」

「それは、貴方が我らが王だからです」

「ん？」

それなら、王なんか辞めるよ」

「辞められては、困ります・・・、メリクリウス様。」

この終末の世界の王は、紛れもなく貴方なのですから、貴方しかないのですから」

「むー」

悩める魔性の少年、それもまた美しい。

ここは、遙か地下にそびえる神殿。

暗黒神殿。
バンデモニウム
万魔殿。

世界の敵であり、終末を望むモノ、終末を呼ぶモノ。

終末を告げる獣である、リヴァイアサンの名を飾る、アンチキリスト反基督の秘密組織。

黒魔術結社《終末の獣》リヴァイアサン。

この魔性の少年こそ、《終末の獣》の首領。

魔人メリクリウス・リヴァイアサン。

マスター・メリクリウスなのだ。

魔人。

その存在こそ、真なる純粋な魔、そのものなのだ。

誰も逆らうことが許されない、正真正銘の王、魔なる王。
この少年こそ、世界の敵である魔人であり、魔王なのだ。

そして、傍らに寄り添う少女。

彼女は、アネモネ。

少女も人ではない、かといって魔でもなく、少女は、ただの人形である。

オートマータ
自動人形。

少女は無機質な機械仕掛けの少女、アネモネ。

銀色の長髪に、透き通った緑水晶の瞳、白蠟の肌。

少女の体内には、水銀の血が廻っている。

そして、人形の心の器には、人間の魂が容れられている。

禁断の錬金術が作り上げた外法の人形である。

終末の獣の魔道士が作り上げた作品。

少女の体内に魔道書を埋め込まれた魔道人形。
グリモワール

それが、この少女、アネモネである。

「だって、孔雀^{ブラアウ}なんかさ。

東洋の小さな島国で、怪しい教団なんかしてるしさ、ほかのやつらだって、遊んでるっていうのにさ」

「メリクリウス様、皆様は、遊んでなんかいませんよ？

まあ、孔雀様は、異界に詳しいですから、あの日本という国は特異点のようです、教団に彼女らを呼び寄せたのも、この世界の為なのですよ？

そう、我らが終末の世界の為に」

「ふーん、それって、例の屍姫かい？

異界から呼び出された子たちでしょ」

「はい、その様ですね」

「へえ、面白そう。僕もその子たちに逢いにいこうかな？」

孔雀にも逢いたいしさ」

魔なる少年が呟いた時。

「・・・お待ち下さい、我が主^{あまじ}」

何もない暗闇から、声が響く。

床の影の中から、ずずつと影が伸びて一人の男性になった。

漆黒の外套に、漆黒のスーツ、そうまるで英国紳士のような風貌の青年。

漆黒の黒髪は、腰まで伸びている。

その鋭い灰色の眼には、片眼鏡^{モノクル}がかかっている。

カッソッ

黒革の手袋には、それも黒い杖をもっていた。

「やあ。ワグナーじゃないか、どうした？」

「ワグナー様」

「お久しぶりで御座います、我が主」

手を胸に当てて、深々と礼をする漆黒の青年、ワグナー。

黒魔術結社《終末の獣》の七人の魔人《七つの獣》の最高幹部であり、《七つの大罪者》のひとり。

傲慢：Prideを司る大罪者。
プライド

禁断の錬金術を操る美貌の黒魔術師。

機械仕掛けの魔道士。
パンツァー・マギエル

ワグナー・フォン・ローエングラム

そう彼は、この自動人形アネモネを練成した錬金術師なのだ。

「あれ、たしか君は倫敦に行ってたんじゃないのかい？」

ワグナーの黒手袋には細葉巻シガリロが握られていた。

「はい、《協会》の後の始末は、彼女。《氷の魔女》ヒルダに任せ
ておきましたから。」

・・・サラマンドル」

何かの名を呟くと。

空間に現れた蛙のようなモノ、真っ黒な鋼鉄の鎧を纏った蛙が現れた。

闇の錬金術が生み出した人造狂精霊。マッド・ホームンクルス

火を司る人造の狂った精霊。サラマンデル。

ゲゴツ、ゲゴツ

醜悪な鳴き声を出しながら。

サラマンデルの、その口から長い舌が、チロチロと動いて、ワグナーの吸い出した煙草に触れると、煙草に火が着いた。

ワグナーがその手でひと撫ですると、サラマンデルは、すぐに消えてしまった。

「ふーん、君がいなくなったと知ったら、きっとヒルダが怒るよ？あはは」

「ふふ、心配には及びません。

私のダミーを置いてきましたから、数日はバレることはないかと」

それに、我が主？ 日本へは私が行きますから」

「えー、どうして？僕がいくのに」

「今、我が主が行かれては我らの計画が狂います。

それに、貴方は王なのですから、王は動いてはいけないのですよ？
我々、兵士が動かなければ、チエスには勝てませんから」

「うー、君も、アネモネと同じ事を言うんだね・・・」

「はい。」

どうか、孔雀プファウの事は私にお任せ下さい。

貴方はごゆるりと。

この世界の終末を見てくださればいいのですから」

「むー、面白くない。・・・お前、死ぬかい？」

「んっ・・・どうし、ま・・・した」

魔性の少年の指がワীগナーを指したと思うと、

ごぼっ。

漆黒の青年の胸にぽっかり穴が開いていた。

「ぐっ、・・・我が主・・・？」

ワীগナーが煙草をぽろりと落として苦しむ。

「ああ、メリクリウス様・・・、どうして？ワীগナー様を」

機械仕掛けの少女も驚いていた。

どさり。

魔道士が息絶えていた。

黒魔術結社の幹部魔道士でもひとたまりもないのか。

魔人にとってみれば、ほんの些細な遊び程度なのかもしれない。

「ワーグナー様!!」

急いでアネモネが近寄ろうとすると。

「・・・アネモネ、やめておけ、無駄だよ」

「そんな・・・」

「ふーん。」

そんな自動人形でも、悲しみという感情はあるんだね。

それは、自分を作ってくれたからかな？

それとも他に感情があると？アネモネ」

にやりと妖艶に微笑む魔性の少年。

「あはははっ・・・」

いきなり、高らかに笑う魔人。

「・・・メリクリウス様？」

「・・・ふん。面白い、僕を欺くとは」

「・・・欺く？」

「見てみな、アネモネ。

ガラクタだよ、それは。

ふむ。まあ、それなら、あのヒルダも騙せるだろうな、あははっ」

血溜まりの中、死んでいる青年。

そこには、まるで、本物のように精巧に作られた人造の人形が横たわっていた。

「・・・ワグナー様」
ほっとしている自動人形。

それを横目で見ながら魔人は呟く。

「ふむ、なかなか良い趣向だったよ、ワグナー！。

惜しいが。少し日本は、君に任せよう。

ただし、僕は視てるからね、君のしていることを、いや、君たち七つの大罪者がしていることを、僕はいつだって視ているんだよ」

少年の両目、ヘテロクロミア金銀妖瞳のオッドアイの瞳には何が写るのか。

永遠の美貌を持つ魔性の少年メリクリウスは、何を見るのか、何を望むのか。

この世の終末を告げる獣。

この世に終末を呼ぶ獣。

黒魔術結社終末の獣の首領。

魔人。マスター・メリクリウス・リヴァイアサン

魔人の中の魔人、魔道の中の魔道、人外の中の人外。

人ならざるケモノ、超越者、大罪者。

混沌を纏いし魔王。

混沌なる首領。カオス・ヘッド

アンチキリスト反基督。666を象る獣。

絶対なる混沌なる世界の敵が。

絶大なる純粹な絶対悪が。じわじわと蠢き、動き出そうとしていた。

「さあ、僕らと共に、世界の終焉を奏でようよ。

ねえ、ニンゲンの諸君」

終末の世界を見下ろしながら、魔人が嘲笑していた。

ノアの虚構「世界」

所詮、こんな世界なんて。

始まった時には、すでに終わっているんだ。

でも、だからって。

何かを始めなきゃ、何もかも終わらないから。

だから、終わらせるために、始めよう？

この始まりに至る終わりの世界で。

創めるんだ。

ああ、全く、なんて単純で。

なんてくだらなくて、なんて可笑しいんだろう。

だからって。

何も始まりもせず、何も終わりもしない、そんな世界なんて。

そんな世界なんて。

ああ、反吐が出るよ。

きつと僕には、この美しくて醜い世界は、僕には、少し酷いのかも

しれない。

先輩なら、どういっただろうか。

世界なんて、くだらないというのだろうか。

いや、きっと先輩は。

ああ、なんて君はくだらないんだ？

この世界がくだらないなんて、良く云えたものだよ、ほんとに、君
というものは。

ねえ、くだらないのはどっちだい？

世界なのか、君なのか、それとも、この私なのか。

どうだい？解るかい？

だったら、もっとしっかりしたまえよ、君は、男の子だろう？

そう男なら。

私のようなかわい乙女を守るのが日本男子というものだろう？

違うかい？雨月君。

まあ、君になら、少しは。

わ、私をだな。

その、なんだ、・・・ま、守ってもらってやってもいいのだよ・・・。

なんていう、頬を赤らめて俯く先輩を想像してみたのだが。

無理無理無理、絶対無理、少しは？・・・無理、むり。

ああ、でも、なんだか僕は少しにやにやしてしまった。

ああ、恥ずかしい、穴が在ったら入りたいよ、いや、入らないけど。

でもね、なんだか少し世界は、捨てたものじゃないと思えたのかな。

こんなに美しく、こんなに醜い世界でも。

僕らは、語り合ったり、笑い合えるんですよね。

そうですね、先輩。

始めよう、終らせる為に。

ああ、でも、僕は先輩を守れるのかな。

なんだか少し不安ですよ、先輩。

第十六話「囚われの赤き屍姫と死人狩りの死神」

カチカチと暗転する電球の光。

薄暗い、仄暗い部屋。

医療機器が大量に散らばっている。

手術用ナイフ、注射器、ペンチ、ノコギリ、錐など。

だが、それらはすべて血塗れだった。

そう、ここは手術室。

そこには、手術ベツトに横たわる血塗れの少女がいた。

両手両足を縛られ、拘束服を着せられている。

燃えるような赤髪の少女の顔には、包帯が巻かれていた。

小さな顔には、小さな赤い唇だけが視えている。

瞳の部分は包帯を巻かれていて、白い包帯が紅く赤く滲んで。

少女の頬を伝う朱の雫が包帯に染み込んで、真っ赤に染まっていた。

縛られた少女は、ただの死体のように動かない。

そう、ただの死体、すでに死体だったモノ、すでに死んでいた者。

ギィ、

手術室の扉が開く。

眼鏡をかけた長身痩躯の白衣を着た男が現れた。

「やあ、ご機嫌はどうかね？ ユミル。

いや、不死なる少女《屍姫》赤嚙ユミル」

白衣の男が少女に問いかける。

「.....」

包帯の少女は無言のまま。

「おや、ずいぶんと無口になったものだね？

ふーん、歯は抜かないでおいたのですが、話せませんか？

おかしいねえ、

ああ、それとも少し、拷問がきつかったですか？

ふふつ、屍が痛みを感じるのも、おかしいものですが・・・」

眼鏡を光らせ、にやりと男は微笑んだ。

「・・・ふん」

包帯の少女は少し口を尖らせていた。

「・・・しかし、不死の身体と云うのは面白いものですね」

白衣の男の手には、透明な容器に入った二つの眼球があった。

白衣の男は、その眼球をころころと弄んでいた。

「ぬう、わらわの眼を返すのじゃ・・・」

ここは、屍殲滅組織《東条機関》の研究所。

仮の姿は、東条病院と呼ばれている。

この病院の地下施設が研究室になっているのだ。

不死を研究し、屍を研究する、

そう、再殺部隊とは相反した部署なのかもしれない、

屍研究所。第一研究室。室長。犀川 アスマ。

それが通称《博士》と呼ばれる、眼鏡をかけた長身の白衣の男の名前だ。

「返せ、返すのじゃ……………、わらわの眼を…」

「ああ、綺麗ですよ、この赤い瞳」

容器に入った双眼をうつとりと見つめている。

「返すのじゃ……………ぐうつ……………うつうつうつ、あああああああ……………」

なんと、屍姫の持つ呪いが発動しようとしていた、

屍姫が持つ禍々しい呪い《呪殺血界》。

赤嚙ユミルの呪い《紅き蛇眼の女帝》。

「ほう……………これが呪殺血界ですか、

ああ、無駄ですよ、無駄無駄、

この研究所全体に対屍用の結界を張っているんですよ、いくら君の呪殺能力でもここは破れませんよ」

「ふん……………わらわを甘く見るでないぞ、ニンゲン」

十二屍徒《ソディアック屍帯十二宮》の【ヴァーゴ処女宮】を司る屍姫。

十二屍徒の第十位である屍姫。

《高貴なる朱の死線・緋姫》赤嚙ユミル。

ざわざわざわ、

屍姫ユミルの赤髪。朱の髪が生き物のように蠢いていた。

ぎちぎち。

赤き少女の周囲から、怨念の渦、闇の瘴気が渦巻きだそうとしていたのだ。

「なつ、馬鹿な・・・、お前の力は奪ったはず・・・。」

「はん。・・・奪われてなどいるものか。」

わらわのこの身に宿る、この魔道書が在る限りな」

うねうねと蛇のように赤い髪が蠢いている。

「くっ、そうか、

君たち屍姫に存在するという魔道書の存在か、

その身体をいくら調べても見つからなかったが・・・。」

「ふん、見つかるはずもないわ、

わらわの麗しの魔道書《エイボンの書》は、わらわ自体なのじゃかな・・・。」

「……なに、あの『エイボンの書』か、

禁断の魔道書《象牙の書》とも呼ばれる存在が。まさか君なのか・

世界に存在するという魔道書。

その中でも禁忌とされ、禁断とされる十二冊の魔道書。

異界を記した、十二冊の魔道書、

魔術協会が追っているのもこの魔道書なのだ。

孔雀教団に在るといふ十二人の屍少女。

十二使徒と呼ばれる屍姫。

十二屍徒《屍帶十二宮》。

双子の屍姫《双児宮》。

黒曜ノエルと黒曜ノインが持つ魔道書《妖蛆の秘密》。

緋の屍姫《処女宮》。

赤嚙ユミルが持つ魔道書《エイボンの書》。

残りの十冊の魔道書と、九人の屍徒。

厄い、禍い、災いを呼ぶ、屍姫の存在。

怪異は始まり、怪異は終わらない、

お前たちがどう足掻こうが、どうにもならん、

怪異は収まらず、屍が蔓延るのじゃ、

やがて、異界の扉が開き、

わらわたち屍姫、

《屍帯十二宮》十二屍徒の女王である、異界の女神。

わらわ屍の姫君。

悪夢の女王。

悪夢の屍女王が再び大災厄を呼び起こす。

ああ、わらわのリリス様が再びこの世に、降臨されるのじゃ。

喜べ。喜べ。下郎が。醜きニンゲンども。

あははははははっ。

狂笑する赤髪の少女。

「あはは・・・、うぐうつ・・・、な、にやつじゃ・・・？」

突如。屍姫ユミルの笑い声がとまった。

コツコツコツ、

手術室に靴音が響く。

「五月蠅い、少し黙れ」

ゆらゆらと忽然と現れた男が呟いた。

「ああああ・・・、お、のれ、き、貴様は・・・！！」

赤髪の少女の動きも止まった、いや、何かに縛られたように、身動きが取れなくなっていた。

「・・・安心しろ、お前たち。屍の好きにはさせん」

幽鬼のような男の青白い顔が現れた。

「この私がいる限りな」

少女はその男の顔を見た瞬間、戦慄し、恐怖していた。

「あああ・・・、いや」

少女が震えている。

「厭厭厭厭厭、厭じゃ・・・」

屍姫が恐れているのか？あの屍姫が恐怖を感じている。

「つ、九十九君、来てくれたのか？た、助かったよ・・・」

「ああ、博士。

こいつが気になったのでな、少し様子を見に来たのだが・・・」

幽鬼のような蒼白な美貌の男、

彼こそ、再殺者を束ねる再殺部隊の隊長、

屍姫すら恐れる、恐るべき戦鬼。

屍を殲滅する鬼、殲鬼。

不死者を狩る使者。

死人狩りの死神。

いくつもの異名を持つ鬼。

最強の咎狗、最凶の再殺者。

屍殲滅組織《東条機関》再殺部隊《隊長》九十九 マダラ。

「おい、ニンゲンを舐めるなよ、死人の分際で」

ヒュンヒュン、風を切る音が響く。

「ああっ・・・・・・・・・・」

赤き少女はその場から動けずに、拘束服の体中から血を滴らせながら気を失っていた。

少女の周囲から、渦も瘴気も消えうせていた。

「いいだろう。」

少し私の糸を巻いておいた。

これでもう大丈夫だろう、博士」

「・・・すまないね、隊長の君に。わざわざ」

「ああ、いや、構わんよ」

「で、九十九君。」

僕になにか用があるんじゃないのか？

君がここにくるなんて、珍しいからね」

「ああ、そうだな・・・」

「この屍姫を捕獲してきた時だけじゃないのか、この研究室に君がくるなんて」

「ああ、博士。」

ひとつ頼まれてくれないか？」

「ん、頼み？君が僕にかね？」

いいだろう。いったいなんだね？」

「うむ、この屍姫を少し借りたいのだが？」

「な、なにを言っているんだ、君は正気か？」

それに、上層部は知っているのか？」

「いや、私の独断だよ」

「だ、駄目だよ。いくら隊長である君の判断でも、

唯一の研究対象であるこの屍姫は渡さないよ、それに上部も黙ってはいまい」

「・・・そうか、なら仕方がないな」

少し男は考えたような仕草をしていた。

ヒュンと風を切る音がした。

「な、なにをするんだ？九十九君。やめたまえ・・・」

博士の体が固まったように動かなくなっていた。

「ん、いや、なに。博士には少し動かずにいてもらっただけだ、・・・
安心しろ。殺しはしない」

「ぐっ・・・やめたまえ、つ、九十九君、・・・ぼ、僕は、知らないぞ、・・・ほ、解くんだ・・・」

もがき動こうとするが、体がぴくりともしなかった。

「無駄だよ、博士。」

私の仲間の為に、この屍姫がいるのだ、やつらに対しての囷に使わせてもらうぞ。

いや、私たち咎狗の餌にな」

「なにっ・・・許されないぞ、・・・そんなこと・・・そんな君の勝手に・・・」

「・・・じゃあな。博士」

すでに気を失っている屍姫を担いで、扉を出て行く。

カツカツカツつ、

靴音が遠ざかる、

「うつ、くつ・・・、まて・・・」

そのままの姿で、数分がたったのか数時間がたったのか。

いつのまにか、僕の身体を縛っている感覚が無くなっていた。

「くそっ！！」

なにが仲間だ。これじゃ、僕の研究が台無しじゃないか、まったく」

屍姫の瞳の入った容器を愛おしそうに見つめる白衣の博士。

「いいだろう。それなら、こちら的手段は選ばない、

・・・おい、いるか？」

博士が壁にかけてある受話器に向かって呼びかけた。

『・・・はい、博士』

くぐもった男の声がした。

「今の話を聞いていたな？」

やつの後を追え、隙をみてあの屍姫を連れ戻せ、いいな？

屍姫だけは生け捕りにするんだ。

といつても、もう死んでいるか・・・くくっ」

『はい、・・・ですが、

交戦になると思われますが？そのときは、よろしいのですか、博士？』

「ああ、かまわないよ、

もう再殺者や、古臭い再殺部隊など、いらないのだ。

そう、これからは、

この僕が生んだ生体強化兵士。
バイオニックソルジャー

君たち、《超兵》による、《超兵部隊》の時代なのだよ」

『はい、お任せ下さい、博士。

我々、《超兵》が必ずや。

では・・・』

「ああ、頼んだよ」

そう言っていると博士は、受話器をきった。

ふふふっ・・・あははっ、

君たちには、渡さないよ、九十九君、

あの屍姫は私のものなのだよ、誰にも渡さない、

ああ、ユミル、

僕のユミル、愛しい僕の姫。

待っていてくれたまえ、

僕が必ず、連れ戻してあげるからね、

そして、この歪んだ世界を変えてやるのだよ、私の研究が世界を変えるのだ。

そうだろ？ユミル、

僕の愛しい屍姫、

あはははははははっ、

かつて天才とよばれた犀川博士は、狂気に駆られた瞳で虚空を見つめていた。

狂気の科学者、犀川アスマ博士は、赤き少女の眼球が入った容器を抱きしめながら、

少女の、その瞳。

《緋の邪眼》と呼ばれる《朱の屍姫》赤嚙ユミルの呪いの瞳《紅き蛇眼の女帝》。

《呪殺血界》の呪いが発動されていたのだ。

狂気の男に抱かれ、二つの紅い眼球が怪しく輝きながら、

まるでそんな狂気を楽しんで視ているかのように、

ゆらゆらと容器の中で蠢きながら漂っている。

いや、その血のような紅い瞳は、狂博士を視ながら確かに嗤っていた。

第十七話「ふたりのアリスと占い師」

学園都市。

数十の学校施設が隣接された、神戸の中心地。

学園都市の主な公共交通機関は、環状線のモノレールであり、学園都市にあるすべての学校施設に駅がある。

モノレールには三宮駅で乗り換えるようになっている。

モノレールを右回りに乗れば、最初の停車駅が九門学園、続いて土御門学園、城戸女学園、聖マгдаラ神学院と続く。

モノレールを左回りに乗れば、東条大学、高野大学、ミスカトニツク大学、やはり聖マгдаラ神学院へと続く。

西園アリスは、自宅のマンションから三ノ宮駅に向かい、右回りのモノレールに乗っていた。

探していた、とある本を見つける為に、アリスは九門学園の図書館に向かっていた。

転校して驚いたのだが、珍しいことに迷宮図書館と呼ばれるこの図書館は、なんと二十四時間開いているというのだ、なんと嬉しいことに、つまり、二十四時間本を貸し出してるのだ。

これもそれも、例の生徒会長であり、魔女たる彼女の絶対命令だと

か噂されているようだ。

まあ、ボクには嬉しいことだけど。だけど、二十四時間も誰が管理しているんだろうな。

夕暮れ時、黄昏時。

そろそろ夜になるうとしていたモノレール内には、珍しく人気がなかった。

それに人気があるうとなかろうとアリスは、この列車が好きだった。

アリスは、九門学園に転校してから、列車に乗るのが楽しくなっていた。

今では、車内で小説を読むのがアリスの唯一の楽しみと言ってもいいだろう。

いま、アリスが読んでいる小説は。

ロシアの作家、ドエトエフスキーの長編小説「罪と罰」

小気味良く揺れる列車の中、アリスは小説を読みながら、うとうととして眠りだしていた。

「あ、いけない、

ボク、寝ちゃってた……、

……あ」

気が付くと目の前に、こちらを見ながら男性が座っていた。乗る時には、たしかに居なかったはず。

それに車内には座席がこれだけ空いているのに。

なぜ、目の前なのだろうか。

なぜ、ボクの目の前で座って、ボクを見ているんだろうか。

はっ・・・、

ま、まさか・・・変態？・・・それとも痴漢？

アリスは、顔を伏せて、黒い制服の上に来ていた黒いコートを羽織りなおし、白い太股が出ていた短いスカートの股を手で押さえた。

アリスは、こっそり見上げると、その男性は、にやりと笑っていた。

ああ、やっぱり、痴漢だ、

・・・どうしよう、どうしよう、

ボク・・・犯されちゃうのかな・・・、

ねえ、ノア、助けてよ・・・、

すると男性が話しかけてきた。

「今晚は、お嬢さん」

「・・・」

アリスは泣きそうになりながら、ただただ黙っている。

「ふふふ、

心配しないでいいんだよ、

それに、私は、痴漢じゃないから」

きらりと片眼鏡^{モノクル}を光らせながら、男は話しかけてきた。

「そもそも私は、変態でもないし、君を犯したりなんかしないし、それに、そんな興味も、少女趣味も、私にはないから」

「・・・どうしてボクの考えてることが？

っていうか、興味もないって何気に失礼だし・・・」

「ふふふ、

なに簡単だよ、

読心術、とでもいうのかな」

「ふーん、読心術・・・、あやしいなあ」

「なに、読心術を使わないまでもなく、君の考えていることぐらい分かるんだよ？

・・・それに私は、占い師だからね」

占い師？

こんなところで、占い？

ねえ、十分怪しすぎるよ・・・、

「占い師？」

明らかに怪しがっている少女。

「そう、

ここで逢ったのも何かの縁、

少し占ってあげようか？お嬢さん、

いや、西園アリス君、

君の運命を占ってあげるよ」

「占いかぁ・・・、

・・・え、どうしてボクの名前を知ってるの？」

大きな瞳を開いて少女は驚いていた、

「もちろん占い師だからね」

にやりと微笑んでいる占い師。

「えー、占いでもそんなのわからないでしょ、

ねえ、おかしいよ、なぜボクの名前が分かったの？」

占い師を不思議がる少女。

「それは・・・、企業秘密だよ」

黒い手袋に人差し指を口元に当てていた。

「それに今日は二人目なんだよ、運命を占ったのは」

「二人目？」

「そう、ここで、アリスと名のつく少女と出逢って、その子を占ったんだよ、」

もうひとりのアリスを」

男は、黒手袋をさすっていた。

「もうひとりのアリス？」

「そう、その子は、確か・・・、」

草詔アリスと言っていたね、とても綺麗な少女だったよ
思い出すように、目を瞑る占い師、

「草詔アリス？」

・・・どうせボクは綺麗じゃないですよ」

「ああ、そうじゃない、

大丈夫、君も十分に魅力的だよ。

それに、そう、彼女は城戸女学園に通っているそうだ。

君は確か、九門学園だったかな？」

「そんなフォーロー知らないよ！
って、どうして学校まで知ってるの？」

明らかに、占いの域を超えてるよ・・・」

「それも、企業秘密だよ、お嬢さんにやりと笑う占い師。」

「もう、貴方は怪しすぎ・・・、ほんとに、占い師なの？」

「ああ、ほんとうに私は、占い師だよ。」

では、証拠に、
もうひとりのアリスの占いを教えてあげよう」

「もうひとりのアリスの占い？」

「そう、草詰アリス、

彼女も奇妙な運命を持っていたよ、

彼女には、『今から君は、運命に出逢い、運命の者に出逢うだろう』と占ったんだよ」

すると、一枚のタロットカードが手品のように男の手の中から現れた。

死神。

十三番目の死神。デス・サーティ

「死神のカード……」

「そう、運命の人が死神なのか、彼女自身が死神なのか、

死神、大アルカナ十三番目にして、十三は不吉の数字でもあり、災いの象徴なのだ。」

それに、死を暗示して、死神の持つ鎌は、首切り鎌、断頭台のギロチンのようでもあるね」

「ギロチン……」

「そう、ギロチン。」

少女ギロチンと呼ばれた事件。

かつての、少女連続ギロチン殺人事件は知っているかね？」

「知らない……そんなのボクは知らないよ……」

「ふむ、そうか……、無理もないか、

当時。君は、いなかったんだからね」

「え……ボク？」

「まあいいさ。」

そう、このカードのように、死の鎌を持つ死神。デスサイズ

死神の意味は、死の予兆、終末、破滅を表し、

また、死後の再生、破滅の再生などの再生を表す、

そして、必ずその運命が訪れる、運命は廻り巡るもの、

運命とは、因果、すなわち、因果律なのだ、

死神、

それがアリス、

彼女にとって、幸せなのか、不幸せなのかは、運命の女神だけが知っている、

だから、『因果を、運命を受け入れ、死神と共に在れ』と

そう彼女、草詰アリスに占ったんだよ」

「ふーん……貴方は、ちゃんと占い師なんですね」
胡散臭いこの男に、少しは感心した少女がいた。

「……まあ、ね、

分かってくれればいいんだよ、お嬢さん」
苦笑いをする片眼鏡の占い師。

「ねえ、占い師さん、

じゃあ、ボクの運命は？占ってくれるの？」

「ああ、いいだろう、

先程、もうひとりのアリスに運命に出逢うと言ったが、

君にも、運命に出逢うんだ。

そして、もうすでに運命に出会っているんだよ、お嬢さん」

「……ボクの運命？」

「ああ、

君の失われた過去を知りたくはないか？

そして、

君の中に居るそのモノがなんなのか知りたくはないか？」

「……ボクの中に居る……モノ」

「そう、お嬢さん、

いったい君はなにものなのか、なにものであるのか」

「ボクは……ボクは……」

「この世界は普遍ではない、

世界は永久ではない、不可思議な世界に、

我らが望む混沌なる世界へ、終末の世界へ、君を誘おう」

「いや……、ボクは、そんな、違う……よ」

「いま……、ここで、

運命の歯車は廻りだしたのだよ、

この運命の輪のように」

ホイル・オブ・フォーチュン
運命の車輪。

占い師は、手の中から手品のように、一枚のタロットカードを取り出した、

永続なる鎖、無限の蛇であるウロボロス、メビウスの輪、

吉と凶、正と邪、死と生が繰り返される永劫の運命、

永久の因果、永遠に廻る因果律、

決してその運命から逃れられない、定められた運命、
フェイト

それが、お嬢さん。君の運命なのだよ」

「ボクの逃れられない運命・・・」

「おまけに、もう一つ、手品をご覧にいれよう」

「もうひとつ？手品？」

かつん、と占い師が持っていた杖を床に叩いた。

「コボルド」

男は、なにか呪文のような言葉を呟くと。

男の影の中から数十体の小さなブリキの人形が現れた。

ギギギギギ、

「きゃ・・・、な、に？・・・これ」

《コボルド》

闇の錬金術師ワグナーが練成した獣人。

男の脚程の大きさと、犬のような狼のような獣の顔を持つ、体はブリキ人形の人造狂精霊。
マッド・ホームンクルス

獣の大きな口の鋭い牙がガチガチと鳴っていた。

ギギギギギ、

「ふふふつ。

何って？これは、君を守る騎士^{ナイト}だよ。

どうかな、素敵だろう？

ただ残念なのは、
アリスを守るのはランプの兵隊ではなく、ブリキの兵隊なのだが
ね」

ギギギギギ、

ブリキの兵隊が少女の近寄っている。

「近寄らないで・・・、いや」

「大丈夫だ、心配ない。危害は加えないよ」

コツコツと片眼鏡の男は、アリスの傍に近づき、形膝を立て、

少女の白い手の甲に口付けをして占い師は呟いた。

【怪異】の申し子、西園アリス。

いや、

異界の姫君よ。

終焉の死天使リリム。

第零の死徒、はじまりの屍姫リリン。

怪異の女王リリス。

そして、

罪深き災厄の三姉妹であり、

三位一体の女神である、

《屍帯十二宮》の主たる、屍の女王。

悪夢の女神リリス・リリム・リリン。

さあ、アリス。

不肖、この時計兎が、トランプの兵隊を連れて、

貴方をお迎えに上がりましたよ。

混沌なる終末の世界、不思議の国に参りましょう。

さあ、アリス。

殺戮の謝肉祭に。
カーニバル

何事かと呆然と見つめる少女を見て、にやりと嗤いながら。

世界の敵こと。黒魔術結社、終末の獣・リヴァイアサンの魔人。
七つの大罪者のひとりである、機械仕掛けの魔道士ワーグナー・フ
オン・ローエングラムは、胸に手を当てて、少女に向かって恭しく
お辞儀をした。

ああ・・・、ノア、助けて。

一瞬、脳裏に浮かんだ少し頼りない少年の哀しそうな顔を思い出し
ながら。

ボクの意識は不思議の国に落ちた少女のように、暗く灰暗い深遠の
底に、まどろみの中にゆっくりとボクは堕ちていった。

少女の手から、

「罪と罰」が零れ落ちた。

第十八話「残酷な愚者のアンチテーゼ」

東条機関のメインビルディングは、世界最大のオフィスビル、アメリカ国防総省本庁舎ペンタゴンを模して作られている。

総床面積34万m²、廊下総延長約28km、階段数131。

ペンタゴンはその名の通り五角形の形をした建物で、5階建てで、各床に環状の廊下がある。

この構造により、世界最大のオフィスビルでありながら、一番遠いところにも10分以内でたどり着くことができるとされている。
繰り返すが、東条機関のメインビルディングはそれを模して作られている。

東条機関のメインビルディングは、約23,000名の研究者、再殺者及び民間の従業員、約3,000名の兵庫県警から出向した援助要員を収容する。

円卓の間。

50畳はあろうかという広い部屋の中心に円卓のテーブルがあり、13の椅子がある。

12人の黒ずくめの使者たち。

十三評議会。

東条機関を影で管理している影の組織である。

黒ずくめの使者たちは闇の儀式の参加者のように一様に異様な仮面を被っていた。

「評議会の皆様、お待たせしました」

開いている13番目の中央の席に、男が現れた。

東条機関総司令 東条ゲンヤ

整髪料をたっぷり塗ったオールバック姿の黒いスーツ。
飄々として笑みを絶やさない、謎めいた掴めない男。
それが【東条機関総司令】東条ゲンヤである。

「東条君、遅いぞ」

「我々を待たせるなんて失礼だぞ」

「我々も暇ではないのだ」

「用件はなんだね？ゲンヤ君」

評議会の声を聞き流しながら、話し出す総司令。

「いやあ、すみませんねえ、再殺部隊で少々問題が起きまして」

「なに、問題だと？」

静かな声の黒い仮面の評議会メンバー。

「ああ、なに、些細な問題ですよ。

ちよつと、捕らえていた屍姫が連れ出されたみたいでして」

ははは、と笑っている総司令東条ゲンヤ。

『それが些細な問題かね？

どうなっているんだね、君の再殺部隊は』

『管理がなっていないようだね、東条君』

『屍姫は、せつかくのサンプルじゃないのかな？』

「ええ、

ご心配には及びません。

逃がした屍姫の居場所も、分かりますから、

再殺部隊の再殺者である彼らは逃げられないのです」

「じゃあ、檻崎君。

画像を出してくれ」

「はい、ゲンヤ様」

東条ゲンヤのそばに寄り添う美人秘書、檻崎マヤ。

通称、マガツカヒ凶風のマヤ。

彼女は、東条機関総司令である東条ゲンヤを補佐する秘書官であり再殺者である。

白く長い足がミニスカートから見え、
短く揃えた綺麗な黒髪の背広姿の美しい女性。

再殺部隊には属していない東条ゲンヤ専属の護衛である。

「さあ、これを見てください」

ぼうつと、浮かび上がった映像。

明かりが消えて暗くなった円卓の中央に浮かんだ巨大なホログラムスクリーン。

スクリーン中央の巨大画面に移ったのは《魔都》神戸の地図。

画面のいたるところに光点が点っている。

光点の下には、シリアルナンバーが表示されており、その光が誰なのかかわかるようになっていく。

「これは、現在の再殺者の居場所です」

そう、再殺者の脳には、特殊なICチップが埋め込まれている。

まず、東条機関の再殺部隊に入隊した者には、

東条機関の研究所より、生命データ、健康データ、再殺能力データを管理するという名目で検査手術が行われる。

その時、再殺者の脳内に特殊なICチップが埋め込まれるのだ。

これにより。

再殺者の居場所や、生命、健康などが一目で管理、監視され、東条機関の人口知能を持つメインコンピュータ《バビロン》が、全再殺者のICチップの情報を管理統括している。

《バビロン》

東条機関の心臓部、頭脳とも云える存在で、多くの懸案、計画等を策定、検討、解決する人口知能を持つマザーコンピュータである。

スクリーンに浮かぶ青い光点は、通常の健康体であり、黄色い光点は、交戦中、戦闘中の再殺能力状態である。

そして、赤い光点が、生命維持が危険な状態である。

メインスクリーンには、青い光が多く、ちらほらと黄色もあるが、ひとつだけ、赤い光点があった。

ふむ、遠坂教会あたりか……。

シリアルナンバー《0999》は、スザクか……、それを見た東条ゲンヤはそっと呟いた。

「スザクか……、死ぬなよ」

「……………」

秘書、檻崎マヤも冷ややかな目で赤い光点を眺めていた。

「これで、追跡は可能です、

それに。もうすでに、手は打っておきましたよ」

『ほつ……』

「再殺部隊の隊長である九十九マダラと屍姫の追跡には
同部隊の処理班を向かわせておきました」

『おお・・・、噂の影の死番隊じゃな・・・』
老婆の声ができる黒い面の評議会メンバー！。

「そうです、

再殺処理班、四番隊を向かわせてます、まずは大丈夫でしょう」

『ほう、幻影のユーリか、
しかし、彼で大丈夫なのかね？

相手はあの戦鬼、死神のマダラなのだぞ・・・』
野太い男の声ができる黒い仮面の評議会メンバー！。

「うーん、そうですねえ、

まあ、いい勝負じゃないでしょうか・・・、
まず二人とも無事ではすまないでしょうが」
他人事のように呟くゲンヤ。

『まあいい。その件は任せたよ。ゲンヤ君』
しわがれた声の黒い仮面の評議会メンバー！。

「ええ、任せましょう。

すべて私にお任せください」
にやりと微笑む東条総司令。

『では、東条君いいかね？』

「ない、なんでしょうか？」

『東条君、

補完計画である《箱舟》はどうなっているのだ？』

『箱舟計画』

『アダム計画』

『我々のアダムプロジェクト』

『死海文書』

十三評議会のメンバーがそれぞれに囁いている。

「ええ、心配いりませんよ。

我々、十三評議会《死海文書》のシナリオ通りに進んでいますよ」

『うむ、そうか……、頼んだぞ、ゲンヤ。

くれぐれも我々を失望させないでくれたまえ』

最後に、白い仮面を被った老人の声が響く。

「ええ、

分かっていますよ、東条議長。

いや、父上と、お呼びしたほうが宜しいですか？議長」

『・・・どちらでも構わんよ』
興味がないように呟く老人。

「そうですか・・・、

では、参りましょうか。

今日という記念すべき日に、 我らが東条機関のために」

その言葉と同時に、一斉に立ち上がった十三評議会のメンバー。

『今日という記念すべき日に』

『我らが東条機関のために』

『我らが東条機関のために』

『すべては我らが東条機関のために』

部屋が明るくなったと思った瞬間。

円卓の席には、ただの椅子だけが残っていた。

「ふう、

疲れるな、老人たちの相手は」

にやりと秘書に笑いかける総司令。

「ふふ、

ええ、そうですね」

微笑みを返す美人秘書。

「なあ、マヤ。

これから忙しくなるぞ、覚悟はいいな？」

「はい、ゲンヤ様。

貴方の為なら、この身を捧げましょう」

「・・・・・・・・そうか」

東条ゲンヤは部屋の窓辺に立って魔都、神戸の街を見下ろしながら囁いた。

「ふん、

冀爺共め、

精々、その腐った脳髓で夢を見ているがいいさ」

東条ゲンヤの横顔をマヤはずっと見つめていた。

ゲンヤはマヤを見ていない、見てもくれない。

東条ゲンヤの、その目に映らない自分が悔しかった。

貴方はいつも誰かを見ている、私ではない誰かを。

貴方はいつも過去を見つめている、私ではない過去を。

ずっと貴方に抱かれている時でさえ、貴方を感じられないのだ。

それでも、それでも。

貴方に抱かれるだけで良かった。

たとえ愛されなくても、私は幸せだった、貴方のそばにすることが。

唯一の私の幸せだった。

いまでもそう、私は誰よりも幸せなのだ。

「.....」

マヤは潤んだ瞳で、ゲンヤを見つめている。

でも。はたして、いま、この人は、偽者なのか、本物なのか。

時に。本人なのか。別人なのか。分からなくなる時があるのだ。

なぜなら、そう、数年前。

東条ゲンヤは何者かによって暗殺されたのだ。

オープンカーで荒廃した神戸市内を移動中、頭部を狙撃された。

隣に座っていた秘書檻崎マヤが、弾けとんだ脳漿を手でかきあつめていた映像が鮮明に蘇る。

当時、なにも知らされていなかった秘書の私は、貴方を守ることが出来なかった。

死んだのは、替玉だとされているが、私にはとてもそうだとは思えなかった。

でも、今の貴方も、貴方なのでしょうね。

ニセモノでも、ホンモノでも。貴方には関係がないもの。

貴方は、終わり。そして、始まるのですから。

【はじまりの再殺者】と呼ばれた伝説の再殺者。

東条機関総司令。東条ゲンヤ。

「イヴ……待っている」

東条ゲンヤはそっと呪詛のように呟く。

「……………」

何も聞かなかったかのように、無言のまま、

東条ゲンヤの背中にそっと寄り添った檻崎マヤはまるで子供のよう
に泣いていた。

翼を折られた瀕死の小鳥のような嗚咽が、部屋中に響き渡る。

東条機関メインビルディングの円卓の間。

壁も床も天井も真白い部屋に、同じ色の大きな円卓と13の椅子が
並ぶその部屋には、

窓から染まった夕日がまるで、呪われた鮮血のように広がって

彫像のように佇む二人を朱に染めていた。

インターリユード 02

ぎりぎり、

頭蓋を万力で締め付けられる感覚に、僕は眩暈を覚える、

脳髓がぐつぐつと沸騰する、

神経の焼き焦げた匂いが、僕の嗅覚を刺激する、

そんな不協和音が奏でる歪な旋律に、僕は吐気がした、

ああ、いつものいつもの頭痛、

ああ、もう厭だ、

ねえ、アリス、

君はどこにいるの？

あの日、君がいなくなったあのときから、

僕のこの頭痛が始まったんだ、

でもね、アリス、おかしいんだよ、

こうして君が、現れてからも、

僕のこの頭痛は治らないんだよ、

ずっとこの吐気が治まらないんだ、

ずっとこの眩暈が収まらないんだ、

ねえ、どうして？

ねえ、君は、アリスなの？

ほんとうに、あのアリスなのかい？

不協和音が響き、

ノイズが木霊して、

赤いサイレンが鳴っていた、

ねえ、アリス、

キミハダレ？

アリス。

助けてあげるよ。

アリス。

救ってあげるよ。

助けてあげる？

救ってあげる？

この僕が？こんな僕が？

五月蠅い、煩い、この偽善者。

何も知らないくせに、何も知らないくせに。

君のことなんか何も知らないのに。

そう僕は偽善者なのかもしれない。

僕は愚かな愚者なんだよ。

だから、アリス。

僕が殺してあげるよ。

愚者は愚者らしく、道化のまま。

君を助けてあげる。

たとえば、背徳者と云われても。

だって、そう僕は愚かで嘆きの愚者なのだから。

第十九話「黄昏の迷い子たち」

学園都市連続殺人事件。

魔都、神戸の学園都市、九門学園の周辺で、

相次いで殺人事件が起きている。

被害者はいずれも中学、高校生が狙われているという、男女合わせて数十人の学生が犠牲になっていた。

その死体には、いずれも大型の肉食獣にでも噛まれたような、食い荒らしたような痕が残っていた。

そして、その死体には血液が一滴も残されていなかったのだという。

そうまるで、吸血鬼にでも遭ったかのように、全身の血が吸い取られていたのだ。

怪異。

大災厄、魔震後に現れた怪現象。

そして、今現在起こっている怪事件、学園都市連続殺人事件。

そう、怪異にそっくりな現象。いや、これは怪異の再現なのか。

それとも、誰かが怪異を模倣しているのか。

再び学園都市に、怪異が現れた。

これは極秘情報なのだけど、事件があった現場で、刀を持った少女が目撃されている。

少女の死体の前に佇む刀を持った少女。

夕暮れ時。黄昏刻。

学園都市にある中央公園。

その怪異の中心に僕は居た。

僕は、九門学園、生徒会執行部、副会長の天ノ目タケル。

そして、いま。

僕の眼の前には、バラバラになった少女の死体と刀を持った少女がいた。

彼女こそ、この怪異の犯人なのか。

嘔吐を堪えながら僕は叫ぶ。

「・・・誰だ！」

ゆっくりと少女は僕を視た。

吸い込まれそうな漆黒の瞳。

「アンタこそ、ダレ？」

真つ赤な血の着いた黒い刀を僕に向けながら、セーラー服を着た少女は無邪気に問いかけてきた。

地面に倒れている後輩、鳥口マモルと、バラバラになった少女の惨殺死体。

怪異、学園都市連続殺人事件。

「……僕は、天ノ目タケル。

お前が、怪異事件の犯人か？」

「犯人？……だったらどうするの？」

「……捕らえる」

「そう捕らえるの……。」

でも、アンタ。怪異を視ても驚かないのね？少し慣れてるのかしら？」

「ああ、怪異には慣れてるつもりだ」

「ふーん、じゃあ、もしアタシが……、屍だったら？」

「……し、屍」

行方不明、神隠しにあった少女たち、再び黄泉返った死した少女。ゾンビ。屍少女。

僕ら、生徒会執行部は学園内の怪異処理を行っている。

魔女である会長、草薙リンネを筆頭に、いくつもの怪異を処理してきたんだ。

ただし会長には、屍には近づくな、ときつく言われていた。

屍は再殺者に任せればいいのだと、僕らでは無理なのだ、

きつと会長は別なのだろうけど、

そして屍が現れたら、会長に報告するようと、命令されている。

怪異は怪異でも、屍は、怪異中の怪異なのだ。

「くっ……」

でも、これでも僕は剣士の端くれだ、僕の剣が屍に通用するのか試したい。

九門学園剣道部主将であるこの僕の力を。

「ねえ、屍のアタシとやるの？」

「アンタのそれ、木刀じゃないの？」

「ああ、木刀だ」

ぎりつと、僕は木刀を握り締めた。

「あはは、そんな木刀でアタシとやろうっていつの？」

馬鹿にするな・・・よし、やってやる。

「見せてやる、ただの木刀だと思うなよ？」

でも、はたして屍に通用するのか？

「・・・十六夜流念法」

僕は木刀を正眼に構えて、呼吸を整える。

念法。

念、その根底となるのは気であり、体内の気を靈的に高めたものが念である。

そして、靈的にまで高められた念は、物理現象を超越し驚異的な威力を発揮する。

ただし、念を発揮するためには、厳しい武術の鍛練が必要となる。念の靈的昇華ですら、並々ならぬ才能と努力を必要とする。

ただし、僕はまだ習得には及ばず、修行段階なのけど・・・。

僕の師匠である、十六夜流念法の使い手、十六夜セツナ。

僕はまだまだ、彼の足元にも及ばない。

だけど、僕の瞳のおかげでなんとか修練できるようになった。

僕ら、天ノ目一族の持つ特殊な瞳。

未来を見る瞳を持つ僕の妹、天ノ目チズルの千里眼。

そして僕、天ノ目タケルの百気眼は、気の道を見ることが出来る。

輝いた瞳で、僕は気の巡りを視る。

そして、木刀に念を注ぎ込む。

よし、いいぞ。

木刀《阿修羅》に念が行き渡る。

僕の愛刀である、この木刀の名は阿修羅。

そこんじよそこの木刀とは訳が違う。

阿修羅は樹齢数百年の霊木、神木より作られた霊験あらたかな木刀なんだ。

だから、念の浸透も、念の威力も違う。

頼むぞ、阿修羅。

「・・・いくぞ」

木刀を構えて、一気に間合いを詰める。

隙だらけだ、いけるぞ。

当たれば、巨木でさえも貫通する威力を持つ。念法による必殺の突き。

「牙突!!」

「・・・ふーん」

少女は黒い刀を構えもせず、ゆらりと動いただけだった。

まさしく紙一重の距離。

「・・・なにつ」

会心の牙突が当たらない、僕の必殺の突きをかわされた。

「・・・」

ぱらり、と少女の黒髪が数本切れていた。

「へえ、牙突か・・・、

完全にかわしたと思ったのにね、

アンタ。面白い技を使うじゃないの」

不適に微笑む黒髪の少女。

くすくす。

「じゃあアタシも、本気でいくわよ」

少女は、右手に持った黒い刀を口に咥えると、左に持っていたもう一本の刀を抜いた。

それは真っ赤な刀身だった。まるで血のような赤い刀。

右手に持つ黒い刀。左手に持つ赤い刀。

「・・・二刀流か」

ゆらゆら。

ゆらり。

舞い踊るような動き。幻想的な、まるで舞踊を見ている様に、

その動きが読めない、隙が在る様で無いのだ。

僕の必殺の突き、牙突もかわされた。

二刀を振り上げながら少女は近づいてくる。

「どうしたの？まだなにもしてないよ？坊ちゃん」

間合いが詰まる。

感じる、剣士としての力量が全く違うことを。

悔しいが・・・、僕じゃ無理だ・・・。

「くそつ、ダメだ、やられる・・・。」

僕は、無力なのか、誰も守れないのか。

こんなところで終わってしまうのか。

鳥口すまない・・・、チズル・・・、会長すみません・・・。

「・・・もういい？死んじゃう？」

ドン。

その時。

目の前に、巨大な岩が落ちてきた。

さっきまで少女が居た場所に。

だが少女は、すでに、巨大な岩を跳びかわしている。

「・・・え、岩が・・・降ってきた？」

そして声が聞こえた。

『待て待て待てえー！』

その勝負。ちよつと待ったあー！』

ん、どこかで聞き覚えのある声だ。

ま、まさか。

「か・・・カゲトラさん？」

「・・・・・・・・」

二刀を持った少女は、その声の方を見ていた。

声の主、巨大な岩を放り投げた張本人。

彼は、生徒会執行部のひとり。

九門学園の傾奇者。奇人。

一応。生徒会執行部の会計をしているが、彼が会計をしているの未だに見たことはない。

執行部の懐刀。ジョーカーとも呼ばれている。

その名も。戦国寺カゲトラ。

獅子のような、ざんばらな長髪を後ろで束ねて、

制服の上から、色鮮やかな女物の着物をマントのように羽織った異様な風体の大男。

女形の口紅や化粧もしているが、美人な青年でもある。

きつとその口調が悪くなければ、女性と見間違えるだろう。

それに何年も留年しているというのが年齢不詳である。

魔女たる生徒会長には気に入られている謎の男。

兎に角、僕の一番苦手な人だ。

わははははっ。

「助っ人参上。」

このカゲトラ様がきたからにゃあ、もう安心だぜ？
タケルちゃんよう」

大声で笑う、仁王立ちの大男、戦国寺カゲトラ。

「カゲトラさん、来てくれたんですか？」

苦手だけど、こういう時、頼りになる人でもあるんだよね・・・。

「はっ、あたりまえだ、

お前だけじゃ不安だからなあ、

ちゃんとその木陰で全部視ていたのよう」

「・・・だったら、助けてくださいよ・・・」

前言撤回……。やっぱり嫌いだこの人。

「馬鹿をいつちやいけねえよ、助っ人つてのは、ピンチの時に現れてこそ、助っ人なんない」

ばしばしと、大きな手で肩を叩かれる。

「……もういいですよ、……あの、痛いですって」

「なに、この変なヤツ……。アンタ、ダレなの？」
黒髪の少女は呆れ顔で、大男を見ていた。

「よう、よう。」

お嬢ちゃん、

俺様を誰だと思っていやがる、
九門学園一のカブキ者。九門学園の最強番長。戦国寺カゲトラ様たあ、この俺様のことよお」

ばばん。

大男は歌舞伎役者のようにポーズを決める。

「カゲトラさん、

番長だったんですか……知らなかった……」
きつと自称だ、きつと。

「……ふーん」

白々しい目で大男を見つめている少女。

「って、えれえ、テンション低いな、おい」

戦国寺カゲトラは、二刀を持った少女を睨んだまま呟く。

「ほう、二刀流かい？」

お前さん、宮本武蔵みてえだな、

じゃあ、俺様は、佐々木小次郎って訳だなあ」

「ふーん、今度は

アンタがアタシの相手なの？」

そう言つて、少女は二刀を構え直す。

「すまねえが、生憎と、俺には長刀がないんだよ。

ほう、武器を持たない者を殺るのか？屍少女さんよお」

両手を肩に上げて、ひらひら振っている大男。まるで滑稽な役者のように振舞う。

「はあ……興が冷めたわ」

少女は、二刀を下げる。

「くんくん……」

それに、お前さん、屍じゃねえな？」

「……へえ、

匂いで分かるの？」

少女は少し驚き大男に問いかける。

「はっ、俺様を誰だと思っていやがる？犬の嗅覚を持つカゲトラ様よう。鼻が利くんだぜい」

「・・・カゲトラさん、そんな特技が・・・」

「おっと、それに匂いだけじゃねえぜ？」

まずは、第一に。

屍は、考えない。

狂ってるんだからよお、そんなにペラペラしゃべらべえよ。

それになあ、お前さん、いま考えたろ？

俺が無手なのに、襲ってこねえ、

第二に。

屍には、刀なんかいらねえ、その歯と爪があるからなあ、

第三に。

目だ。屍の目にしちゃあ、生き生きとしてるぜ？お嬢ちゃん。

屍の眼は・・・、呪いだよ、ありゃな。やつらの目は狂っていやる」

どこか遠くを見上げながら語る戦国寺カゲトラ。

「カゲトラさん・・・」

どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか。流石は、歌舞伎役者。

それとも、全部本当なのか、謎の美丈夫、戦国時カゲトラ。

「アンタ・・・どこまでしっているのよ？」
驚いている黒髪の少女。

「はん、そんなこたあ、常識だぜ」
チツチツチツと指を振る。

「・・・え、僕はしらないですけど・・・」

「お前は無知すぎんだよ、馬鹿。」
バシン、痛い・・・頭を叩かれた。

「やめた、やめた。」
アンタ・・・なかなか面白いわね。

それに、もうちょっとそこの坊ちゃんで遊ばうとしたけど、
もう止めるわ」

「・・・僕で遊ぶって・・・そんな」
僕は遊ばれただけなのか・・・、シヨックだ。すごく、シヨック・・・。

「ああ、そうだよ、アタシは、屍じゃない。

れっきとした人間だよ、

アタシは、サキモリ防人。

屍は、ほら。

そこの転がっているバラバラ死体の方よ」

黒い刀で、バラバラになった屍少女を突き刺した。

殺された少女ではなく、すでに死した少女。屍少女。

「防人だつてえ？」

じゃあ、お前さん、再殺者じゃねえのかい？」

「そう、アタシは、再殺者じゃないよ。

防人の烏丸アスカっていうの」

「それじゃあ、お前さん、
封殺局のお役人さんかい？」

「・・・驚いた。アンタ、どこまでしってるの？いったい何者よ？」

「はん、

知らないものは知らないし。俺は知ってることしか、しらねえよ。

第一。俺様は俺様だ、ただの道化。カブキ者だぜい」

カカッ。

「あの・・・防人ってなんですか？カゲトラさん」
僕は小声で聞いた。

「なあ、俺たちも怪異を感じるなら分かるだろう？タケル。

境界を見張る者。

狭間を監視する者。

怪異の封殺者。

境界の護り手。それが防人よお」

古より存在する闇の官庁。

夜狩省封殺局の護り手《防人^{サキモリ}》。

「そう、でも怪異には気を付けなさい。

境界が薄れているの。」

それに、アンタたちの言っていた殺人事件の犯人なら知ってるわよ」

「ほお、いったい誰なんだい？お嬢ちゃん」

「え？怪異事件の犯人を？」

「ええ、アタシたち防人も追ってるのよ、……教団を」

「……教団」

「孔雀教団に存在する屍姫よ」

「……屍姫」

「そう、畏怖なる屍少女。

その上位種である屍姫よ。

そして、この怪異事件の犯人、死を穿つ剣の屍姫と呼ばれるモノ。

その名を、蒼哭エイムと云う」

かつ。

「おいおい。いいのかい？

極秘情報じゃないのかい？屍姫の存在はよお」

「いいんじゃないの？

それにアンタ、随分と詳しいみたいだからね」

「なるほどねえ、犯人は教団の屍姫となると・・・。

こりゃあ俺たちじゃあ、どうしようもねえなあ、タケルちゃんよう」

カカ、と笑いながら、

「ええ、

アンタたちは、このボウヤを連れてもう帰りなさい」

防人の少女は、倒れている少年鳥口マモルを担ぎ、僕に渡してきた。

ああ、よかった、

馬鹿少年は、ぐっすり眠っていた。

「おっと……、」

そうはいかねえみたいだなあ。防人のお嬢ちゃん」

かつ。

「どうしたの？カブキくん」

「おーおー。あれを見てみなよ、

噂をすれば、何とやらだねえ」

僕は、カゲトラさんの指差した方を見た。

公園の入り口。

そこには。

刀を持った蒼い髪をした少女が佇んでいた。

あの異様な異形の少女こそ、殺人事件の犯人であり。怪異中の怪異だった。

「……あれは……あの女の子は、怪異……屍」

「そう、怪異は怪異を呼ぶのよ。」

ついに本命が現れたようね。

待ってたわ、……屍姫」

夜狩省封殺局の《防人》烏丸アス力は不適に笑いながら呟いた。

そう、怪異は終わらなかった。

ちよこんとドレスの裾を摘みながら腰を折る少女。

「御機嫌よう。

愚かなる人間さん。

煉獄より使わされし、屍の使徒《死を穿つ蒼剣》蒼哭エームと申します。

わたくしと少し遊んで下さるかしら？」

少女は小さな手で口元を隠し、くすくすと、愉快そうに嗤った。

そして、そのどろりと濁った瞳で僕らを見つめていた。

《十二屍徒》第九位にして。

《屍帯十二宮》の《天蝸宮》スコーピオンを司る屍姫。

《死を穿つ蒼き剣・亡姫》蒼哭エーム。

蒼き瞳。蒼き髪の蒼きドレスを纏いし少女。

くすくす。

蒼き髪の少女は、体に似合わない大きな剣を携えていた。

少女の体ほどに大きな剣。

その大剣は、異様な形だった。

それははたして剣と呼べるのか。

その剣は、まるで生き物のように蠢いていたのだ。

ぞくり。

僕は、震えていた。武者震いじゃなく、

本気で恐怖に震えていた。

そして今なら、会長の言った言葉の意味がよく分かる。

『怪異中の怪異である屍、屍少女には近づくな。』

特に、屍の姫には、絶対に出逢うな。

出逢えば・・・必ず逃げろ、死にたくなければな』

そして僕の腕の中の後輩、鳥口マモルだけは、幸せそうにぐっすり眠っている。

魔都、神戸、学園都市の中央公園。

黄昏刻。

怪異は終わらない。

いや、怪異はまだ始まったばかりだったんだ。

「皆様、はじめまして……、

そして、

……さようなら」

蒼い髪の少女が、くすくすと嗤っていた。

第二十話「愚者と占い師」

ふと気付けば辺りは随分と暗くなっていた。

夕闇。

闇が訪れようとしていた。

その中を。

僕はただ、とぼとぼと歩いていた。

ぎゅっと握った僕の手には一枚の写真。

少女。

ひとりの少女が写っていた。

アリス。

西園アリス。

西園アリスの写真。

先輩から渡された写真には、包帯だらけの少女が映っていた。

まるで闇のような漆黒の瞳。

なにを見たんだ？

虚空を見つめる瞳。

アリス。

君はなにを見たんだ……。

空洞のような虚ろな瞳。

アリス。

九門学園の迷宮図書館の館長室で先輩と話した、その後。

まだ先輩がなにか僕に言っていたがそれも覚えてはいない。

ただ先輩が何度も言っていた一言。

『彼女には気をつけろ』と、

それだけは、何故だか僕は、はつきりと覚えていた。

先輩。

魔女と呼ばれた白い文学少女。

草薙リンネ。

先輩は、なにかを知っていたんだろうか。

そう、アリスのことをなにか知っていた。

気をつける、か。

だけど。僕はその言葉に苛立ちを感じていた。

アリス。

僕の知らないアリス。

僕の知っているアリス。

誰なんだ……。君は……。

それに。

先輩がまだなにか僕に隠していたのも気に食わなかった。

先輩。

だから。逃げ出した。

その場から。

アリスから。

先輩から。

彼女の。

草薙リンネの真っ直ぐな、透き通るような、真紅の瞳から。

逃げた。

僕が握っていた黒い少女の手からも。

僕の友達になった優しい少女。

ナコト。

ナコトちゃん。

その小さな少女の手を無理やり振り解いて。

逃げた。

一瞬見せた少女の悲しそうな顔からも。

僕は逃げた。

なにも聞きたくなかった。

なにも知りたくなかった。

だから。

迷宮図書館から飛び出した僕は。

夕闇の街。三ノ宮の商店街をふらふらと歩いていた。

ねえ。

アリス。

君は、アリスなんだよね？

君は・・・。

あの頃のままの君なんだよね・・・。

あの時。

先輩は冗談を言っていたんだよね？

僕をいつも困らせているように。

いつもの先輩の戯言なんだよね？

アリス。

よし。

アリスに逢ってちゃんと話をしよう。

よし。

考えたって仕方がない。

ちゃんとアリスに話を聞こう。

僕の話もしよう。

いままでの僕と。

いままでの君の。

懐かしい昔話でもしよう・・・。

ご丁寧に先輩から渡された封筒の中には西園アリスの自宅の住所まで書かれた地図が入っていた。

・・・はあ。もう、先輩・・・。

気をつけろって言うてたのにこんなものを渡されて、いつたい僕にどうしろっていうんだよ。

まったく。ねえ、先輩。

「ちょっと。その少年」

愚痴を言ってた僕に後ろから声をかけられた。

「ん・・・。

はい？どなたですか？」

僕は振り向いて声の方を向いた。

「・・・なにか。

悩んでいるのかい？

どうだい。ひとつ、占いでもどうかと思ってね、

悩める少年」

声をかけた男は黒いコートに黒いスーツ。黒いシルクハットを被つて、片眼鏡モノクルを黒手袋で触っている。

それは明らかに怪しい人物だった。

「……いえ、僕は悩んでなんていませんから」

ああ、怪しい。なんだ？この占い師。きつと関わると危険だ。

「ふむ、

私の占いはよく当たるんだよ？

それに嘘はいけないな、悩み多き少年」

「う……嘘なんかついてないです」

そう言いながら怪しい占い師は、僕に近寄ってきた。

「ねえ、雨月ノア君」

英国紳士風の怪しい男は、僕の名前を呼びながらシルクハットを胸に当て、にやりと微笑んでいた。

第二十一話「白い魔女と黒の魔女」

「お止めしないで宜しかったのですか？お嬢様」

迷宮図書館の最深部。

迷宮図書館、館長室。

図書館の主の部屋の開け放たれた扉を閉めながら草薙家の執事である後木が呟いた。

「なに、かまわないさ。

雨月君なら大丈夫だよ。そう彼なら、ね」

白い少女がもたれながら、ギシギシと安楽椅子が揺れる。

「そうは言われなくても・・・。

雨月様はお嬢様のご親友ですし、やはり少々心配ではないかと・・・

「

そう言いながら執事が額の汗を拭いてる。

黒い執事服に身を包んだ草薙家の執事。

黒執事、後木。

「ふう、ほんとに後木は心配性だな？安心しろ。

私も友人をほったらかしになどしないさ。ちゃんと手は打ってあるんだよ」

そついいながら少女、草薙リンネは心配性な執事に語りかけた。

草薙リンネ。

憂いあるその真紅の瞳。

透き通るような純白の髪。

硝子細工のような白い肌。

世にも珍しい純粋なアルビノの少女。

白き魔女。

「雨月君には、先ほど発信機をつけておいたんだ。そして、後は奴に依頼している」

白い文学少女は眼鏡を指で押しながら呟いた。

「ま、まさか？お嬢様」

驚愕に歪む執事。

「そう、そのまさかだよ、後木。

雨月君にもちゃんと護衛を付けてあるんだ」

「護衛と申しますと・・・まさか、あの」

「まさか、あの・・・前木をね」

ニヤリと笑う魔女リンネ。

「・・・前木。」

あやつをですか。いやはやかたありません・・・。

ですが。

まあ、ですが。少しは安心でしょうな」

「ああ、すごぶる安心だよ、後木」

なんだかホッとしたようで危なかつしい表情の執事であった。

「さて、と」

草薙リンネが安楽椅子に深くもたれかけた。

「またせたね。」

私の友であり、小さな魔女ナコト」

「うん。リンネはともだち」

「ふむ、それにまさか。」

いまの私の所に魔術協会の君がやって来るなんて随分と珍しいじゃないか？」

魔術協会という響きだけで忌み嫌っている魔女、草薙リンネである。

「うん、リンネ。」

あのね。詳しいことはナイアに聞いて？」

げし。

ナイア！！、そう言って金髪碧眼のゴスロリ少女ナコト・トート・クロウリーは床で寝そべっていた黒猫を蹴った。

「痛っ……」

もう、なにも蹴らなくてもいいじゃないか、ナコト。

酷いなあ……」

喋る黒猫ナイア・ラ・トテップ。

魔術協会の使い魔であり。錬金術により練成された^{ホムンクルス}人造精霊である。

「お久しぶりでございます。」

《白き月の魔女》リンネ様。

あの……。早速ですが、どうかリンネ様にお手伝いして頂きたい事がございまして。

はるばる倫敦《時計塔》より。こうして、僕とナコトが参ったのでございます」

元魔術協会の『虹の賢者』と呼ばれる《七色の魔術師》のひとりである《白色の称号》を持つ高位魔術師《白き月の魔女》草薙リンネ^{ホムンクルス}に向かつて恭しく頭を垂れる人造精霊の黒猫ナイアは、いっになく真剣な表情をしていた。

第二十二話「揉め事処理屋の退屈」

だるい、だるい。

あー、だりい。

つか。

なんで俺がこんなガキを見張らなきゃダメなんだよ。え？

なんで俺様が……。

そう言つて、ぶつくさ文句を垂れながら。

夕闇の街。三ノ宮の商店街を歩く、とある少年を尾行している長身の男。

名を。ゼンキ前木

前木ジュウゴ、と言う。

浅黒い肌。

身長180くらいの長身。

美形だが、少し濃い顔立ちをしている。

彼は。

草薙家のSPでもあり、草薙家専属の揉め事処理屋である。

まあ、草薙家専属といっても。

主に前木は、ほとんどいいほど白い少女、草薙リンネの為

だけに動いている、リンネ専属の護衛である。

執事の後木と違い性格に少し難があるようだが・・・、まあ、それは彼の能力になんら関係がないことなのでその説明はやめておこう。

トラブルシューター
揉め事処理。

草薙家、それも草薙リンネには、必ずといっていいほど揉め事トラブルが起ころうのだが。

それは小さな事件から、果ては大きな事件までの、揉め事処理。
強いて言うなら何でも屋である。

草薙家に纏わる良からぬ揉め事など。

あるいは、生徒会執行部からはみ出した危険な仕事。
そう、リンネ嬢からの特殊な依頼である怪異処理。

あるいは、魔術協会関連の草薙リンネに関するトラブルなどの対魔術師処理。

まあ、それが一番厄介なんだがな・・・。

特に、魔術師のやつらはいやらしく、執拗にしつこいのだ。

ま、そんな感じ。

どちらも、一筋縄ではいかない仕事を、いつも前木は飄々とこなしている。

揉め事処理屋。

ある意味、そんな彼も怪物なのかもしれない。

怪物ねえ。おもしれーな。

それに前木は、かつてあらゆる世界の紛争に関わっていた一人軍隊ロンマンアーミーと呼ばれる凄腕の傭兵であった。

戦場では、狂った狼の如き、戦いの修羅と化していた為、仲間からも敵からも畏怖の名を込めて。

《ベルセルク狂狼》。

伝説の狂戦士の異名を持つ傭兵なのだ。

ある時。ある戦場で。

白い少女に出逢った。

そして俺は、白き魔女である草薙リンネにスカウトされた。

『お願いだ、私のもとに来ないか。』

そして、お前のその力で私を守ってはくれないか？』

少女の澄み切った赤い瞳に俺は吸い込まれた。

真紅の瞳。

ほう、アルビノか・・・、珍しいな。

吸い込まれそうな程。純粹な視線。

こ、この女……。

まるで、魔女が持つという魅了の呪文のように。

『なんだ？そんな、人を怪物のように見ないでくれないか。

それに、そんな目をするな、そんな悲しい目をするな。

お願いだよ、前木。

ほら、私と共に来い。お前にも世界を見せてやろう。

いや、私と一緒に世界を見てはくれないか？』

俺は一瞬で魅了された。

この白い少女は、戦場で恐れられた俺を見ても、恐怖や驚きすらしなかった。

まっすぐに俺を見ていた。見抜いていた。

狂った俺を。

こんな俺でも役に立てるのか。

こんな破壊と殺戮しかできない、こんな力でも。

あんたの役に立てるのか？

草薙リンネ。

俺は、この少女を、この天使を守りたいと思った。

白い女神。

あの頃の俺は、なにかも失ってばかりで。

破壊と殺戮の繰り返しだった《壊し屋》な俺の目の前に。

あの日。あの戦場に。

白い天使、いや、白い女神が舞い降りた。

………終わりだ。

つとまあ、そんな大昔のことは、また別の話にしてやるよ。

え。そんなに、お嬢と俺のラブロマンスな物語が聞きたいのか？

……ああ、やめやめ。

だるい。だるい。

まったく。お嬢もなにを考えてるんだか……。

あの後木は、お嬢に付きりだから仕方ないが、その他のトラブルには俺が全部処理しなくちゃならないんだぜ？　ほんと頼むぜ……。

って、人使いが荒いよな、お嬢。

ふふっ、まあ、そんなお嬢も魅力的なんだけどな、惚れちゃうぜ。

ツンデレ？

あー、けどな、俺はMじゃねえぜ？そこんどこ間違えるなよな？

高級スーツに身を包んだ男は、胸から手櫛を取り出し、髪を整い始めた。

ふう、っーか。

お嬢の頼みじゃなかったら受けないぜ。

こんなダリイ依頼は。

ってか、後木の奴はいいよな、いつもお嬢のそばにいられるんだから、執事が羨ましいぜ。まったくよー。

前を歩く、とある少年。

ぶつくさと文句を垂れているが流石に一流なのか、通行人すらもまるで気配を感じさせない完璧な尾行を続けている。

まあ、お嬢に泥を塗るようなことはしたくないからな。

あのガキ、お嬢に慕われてやがるのか？

見るからにパツとしないけどな、お嬢はああいうのが好みなのかねえ。

「おっと」

前を歩いていた少年雨月ノアが立ち止まり後ろを振り向いた。

前木は完璧な自分の尾行がバレたのかと一瞬ドキリとしたが、少年は誰かに呼び止められていたようだ。

「ん？」

おいおい、びっくりさせるんじゃないよ。

ありゃあ誰だ？あのガキの知り合いか？

可笑しな格好しやがってふざけているのか？

少年と話しているのは英国紳士風の怪しげな男だった。

「………妙だな」

それに、あいつ、ただ者じゃないな。

この俺から気配を感じさせなかった奴は今までいなかったからな。

なぜなら。それにさっきまで。

あのガキが振り向くまであそこには誰もいなかった。
誰も存在しなかったはずだ。

だったら、考えられることは。

一瞬である場所に現れたことになる。

へへっ、これがお嬢が言ってた怪異ってやつか？

『これからおこるであろう怪異から私の親友を護衛してはくれないか、そんなことを頼めるのは、前木。お前しかないのだ』と。

それにあんなに真剣なお嬢の瞳を視たのは久しぶりだからな、依頼を引き受けたんだけど。

「ふーん、そういう訳か」

でも、まあ面白くなってきやがったな、久しぶりの怪異か・・・あるいは、魔術師か。

「それに、魔術の匂いがするな・・・」

《ベルセルク狂狼》と呼ばれた男は、ふふんと、にやけてながら、腕をぽきぽき鳴らし、髪をセットしながら櫛をスーツの胸に入れた。

元傭兵《ワンマンアーミー一人軍隊》前木ジユウゴは少年、雨月ノアと話している怪しげな漆黒の男をただ静かに見張っていた。

そう、獲物を狩る狼のように。

ナイア夜想曲（ノクターン）

げしげしげし。

げしげしげしげし。

あの・・・、ちょっと痛いんですけど？

あら、そう。

痛くしてるんだけど。

あ、あのさ、ナコト。

なによ？ナイア。

ぼ、僕を蹴るのは止めようよ、ね？

どうしてよ？

ど、動物虐待で動物愛護団体に抗議されるよ？

ふーん。

げしげしげしげし。

ふーんって・・・。

げし。

くすん・・・。

ひく、ひつく・・・。

な、ナコト？

ねえ、・・・どうしたの？

なんでもない・・・。

ひつく。ひつく。

あ、ごめん。ナコト、

どうして、あんたが謝るの・・・、
バカじゃないの・・・。

うつ・・・、

ねえ、ナイア・・・、どうして。

どうしてなの。

どうしてナコトだけなの？

な、ナコト。

ま、まさか、魔法協会や魔法学院のあいつらにまたなにか言われた
のかい？

ねえ、ナコトはバケモノなの？

ナコトはニンゲンじゃないの？

ねえ。ナコトは。

ニンギョウなの？

ナコトは、ナコトは。

カイツツなの？

ナコトはここにいちゃいけないの？

学院にも。協会にも。

いちゃだめなの？

ねえ、ナイア？

ナコトはいらない子なのかな？

ナコト。

大丈夫。

大丈夫だよ。

ううん、大丈夫だから。気にしないで、ナコト。

あいつらの言うことなんか気にしないで。

ナイア。

ナコトはナコトだよ。

ナコトはバケモノなんかじゃないし、ニンギョウでもない。

ナコトはニンゲンだよ。

ナコトはナコトじゃないか。

それに、ナコトはトモダチだろ？

僕のトモダチじゃないか。

だから。

ナコトにここにいてほしいし、ここにいていいんだよ？

・・・ほんと？

トモダチ？

ナイアのトモダチ。

ナコトはトモダチ。

うん。ほんとだよ。

だってそれに、君はこんなにも温かいじゃないか。

ぎゅう。

ほら、あったかい。

ぎゅ。

うん、あったかい・・・、

ナイアも、あったかいよ。

ぽかぽか。

ナイアとナコトはぽかぽか。

ナコト。

だから。

ほら、もう泣かないで。

ペロペロ。

あ、ナイア、くすぐりたいよ。

ペロペロ。

もう、やめてよ。くすぐりたいって、

くすくす。

あはは・・・、

あうう・・・、

ね。

なんだか、ねむくなっちゃったよ・・・。

むにゃむにゃ。

いいよ。ナコト。

ゆっくり眠っていいんだよ。

うん・・・、

おやすみ。

おやすみ。ナコト。

くー。くー。

すやすや。

むにゃむにゃ・・・。

・・・ママ・・・パパ。

ナコト。

少女ナコト。

《魔術協会》の《魔法学院アトラス》に在籍している幼き魔術師。

ナコト・トート・クロウリー。

若干15歳で、《魔術協会》高位魔術師の証。

《虹》の階位《黒》の称号を与えられた少女。

七人の魔術師《虹の賢者》のひとり。

《黒き森の魔女》

魔道少女。

クロウリー一族の最秘魔術の結晶。

魔術人形。

クロウリー家に伝わる秘法。

グリモワール
魔道書《ナコト写本》の器として。

《協会》により、生み出された魔道人形。

小さな魔女ナコト・トート・クロウリー。

ねえ、ナコト。

たとえば、君がニンギョウだと言われても、
ニンゲンじゃなくても。

たとえば君がバケモノだと言われようと。

僕は君のそばにいるから。君から離れないから。

君を守るから。

僕がいるから。

君はひとりじゃない、ひとりになんてしないから。

ねえ、ナコト。

そついうと黒猫は、その安らかな少女の寝顔から流れる涙をぺろつ
と舐めた。

第二十三話「影の追跡者」

「起きているんだろう？」

背負っている赤髪の少女に問いかける幽鬼のような男。

「おい」

どさっ。

男はいきなり背負っていた拘束服の少女を地面に落とした。

「ふぎゃ、

い、痛いわ・・・、なにをするのじゃ、おぬし」

喚いている赤い少女。

「ふん、起きているなら自分で歩け」

男は少女に冷ややかな視線を向けている。

「乱暴じゃな、少しはわらわに優しくせんか・・・」

「優しくだと？」

お前たちはただの塵に過ぎん。

まだ死者になら敬意も示そう、だがお前は屍だ。

生きる屍だろう？

腐った死体に過ぎないのだ。

いま再殺されないだけ有り難いと思え」

忌々しそくに吐き捨てる幽鬼のような黒衣の男。

《東条機関》再殺部隊隊長。九十九マダラ、である。

再殺部隊の最強の猟犬。

最強最狂最凶の再殺者。

死の咎狗。

死人狩りの死神。

殲滅する鬼。殲鬼。死神のマダラ。

そんなマダラに睨まれ、しゅんとなって弱っているの少女。

《屍姫》赤嚙ユミル。

十二屍徒《屍帯十二宮》ソディアックの【処女宮】ヴァーゴを司る屍姫。

十二屍徒の第十位。

《高貴なる朱の死線・緋姫》赤嚙ユミル。

うぬぬ・・・、

わらわはそれでも赤き使者。緋の屍姫と呼ばれた畏怖なる屍なのだ。

これでもな、はあ・・・。

だが、こやつには以前にも一度捕まっていたのじゃが、それはまた別の話じゃ。

兎に角、わらわはこやつが嫌いじゃ、苦手なのじゃ。

うぬぬ。

それにこやつは本当に人間なのか？恐ろしい強いぞ、わらわ、屍姫をこれほどに畏怖させるとは。

憎き再殺者じゃ・・・。

くつくくつ。

だがしかし、待っておれ、もうしばらくの辛抱じゃ。

わらわの邪眼。呪いの瞳で操ったあの博士、という奴を仕向けておるからなあ。

ニヤニヤしている目隠しの赤髪の屍姫。

屍研究所。第一研究室室長である博士。

《狂博士》犀川アスマ。

犀川博士により、拷問（調査検査）を受け、両目をくりぬかれてい

る為、白い包帯で目隠しの状態にされている。

すでに包帯は、血で染まって紅い包帯になっているが。

「なんだ。なにが可笑しい？

気でも狂ったか。

それとも、元から狂っているのか。

ああ。それよりお前たちのアジト。《教団》の本部に連れて行って貰うぞ、屍姫」

教団。

新興宗教団体《孔雀教》。

熱狂者。狂信者。異常者。異能者などが集まるといふ、怪しいオカルト宗教組織。

《孔雀教》の教祖であり、教主《孔雀^{フフアウ}》は、超常たる神力を持つと噂される神人であり、かの大災厄《魔震》を起こしたとも噂される預言者でもある。

この世の終末を崇拝する《孔雀教団》。

屍。

死せる怪異。

終末を呼ぶ獣である屍。

そして《孔雀教団》には、屍がいるとされる。

その教団本部には、屍の姫。十二体の屍姫がいるとされている。

《孔雀教団》

屍を崇拝し、

終末の天使。十二死徒。

異界の女神である屍姫を崇めている。

「だ、誰がお前になど教えてやるものか」

「ほう。余程、死にたいらしいな。」

いや、再殺されたいか。

それとも、また元の研究所に戻るか？」

ぎりぎり……。

九十九マダラの見えない妖系で紅き屍姫ユミルの体が締まっていく。

「ぐっ、ま、まで、わかった……わかった」

「なに？聞こえないな」

ぎりぎりとし更に少女の体が締まていく。

九十九マダラの妖系は屍姫の不死なる体にさえも、苦痛。痛みに苦しませるのだ。

再殺部隊隊長。

九十九マダラの能力。

見えざる妖系を操る力。

すべてのものを断ち切る、千分の一ミクロンの特殊鋼の妖系。

それに触れたものは、屍であろうが何であろうが全てを切断する魔系である。

「わ、わかった……。つ、連れて行ってやる！」

そう赤嚙ユミルが叫んだ途端、ふっと妖系が緩んでいた。

「そうか。なら早くいけ」

《屍を狩る死神》九十九マダラは鋭利な瞳を赤嚙ユミルに向けた。

くっ……。覚えておれ。

教団に着いた時がおぬしの最後じゃ。

八つ裂きにして、呪い殺してくれるわ。

「ん？」

こやつ動きが止まったのか？

そう、九十九マダラは静止していた。なにかを探るように。

影。

夕闇の道に。

ゆらりと。

街灯に照らされた影が出来ていた。

影である。

影のみが街灯の下に現れたのだ。

「……ふん」

そして再殺部隊隊長、九十九マダラは目の影に向かって呟いた。

「ユーリか？」

「はい、九十九さん。お久しぶりです」

影。

その影が喋った。

そして、影が起き上がった。

徐々に。

影が形になる。

そして。その影は、口元まで黒いマフラーで覆った幼い顔の少年姿になっていた。

「操影術・潜影」

九十九マダラと同じ黒いコートの腕章には「四」の文字。

《再殺部隊》四番隊の再殺者。

葬儀ユーリ。

操影術。

影を操る再殺者。

影を操ることから、

またの名を。

《幻影のユーリ》と呼ばれている少年。

《再殺部隊》再殺処理班の『影の死番隊』と呼ばれる四番隊。

《再殺処理班》とは。

再殺後の処理を専門に行う部隊である。

または。

能力が暴走して狂った再殺者や、離反した者、裏切り者たちの処理である。

処理とは、再殺者の拘束。及び、再殺者の暗殺などである。

「・・・そこを、どいてはくれないのだろうか」
九十九マダラが呟く。

「はい・・・」
《幻影のユーリ》が、ゆらりと《戦鬼》九十九マダラの前に立ちはだかる。

「九十九さん。」

すみませんが、命令により。貴方を拘束します」

第二十四話「這い寄る混沌」

「リンネ様。

どうか僕らに、白き月の魔女たる、貴女の御力を貸してくださいませ」

頭を下げる黒猫。

「・・・」

草薙リンネはただ黙って黒猫を見ている。

迷宮図書館。

迷宮図書館の最深部。

迷宮図書館、館長室。

迷宮図書館の主の部屋である。

そして、迷宮図書館の主とは、安楽椅子にもたれている少女。

主の名は、草薙リンネ。

白い髪。白い肌。赤い目。

まるで女神のような美しいアルビノの少女である。

白き魔女。

そう、かつて彼女は魔術協会の魔女であり、《白き月の魔女》と呼ばれていた。

少し少し昔の話ではあるのだが。

くくくつ・・・。

どこからともなく笑い声が聞こえた。

「ん・・・？」

ぞくり。

黒猫に、おぞましい寒気がするほどの殺気を当てられていた、それ
も天井から。

「久しぶりだな、ナイアーラ・トテップ」

声のする方。黒猫ナイアーラ・トテップは天井を見上げた。

「き、君は・・・」

その天井には、白い蛇が張り付いていた。

美しい白蛇である。

チロチロと二股の赤い舌を出している。

その姿は、神々しい程の白き蛇であつた。

「……君は、エリユ……」

「気安く、馴れ馴れしく俺の名を呼ぶな」

「わあ。へびさん、シロへびさんだ」

黒いゴスロリ少女が、きゃっきゃつと喜んでいる。

「ふん、……ナコト・トート・クロウリーか」

そう言つと白蛇は天井からふわりと、降りてきた。

「きれー、きれーだね、へびさん」

黒いゴスロリ服の少女ナコト・トート・クロウリー。

魔術協会の魔女である。

小さな魔女。

黒き魔女。

《黒き森の魔女》と呼ばれている。

「魔道人形に闇の精霊か、お似合いだな。相変わらず……」

なあ、

《這い寄る混沌》ナイアーラ・トテップ!」

ぞくり。

ぞわり。

黒猫が這う。

シャーと、威嚇しながら睨む美しき白蛇。

「……ナコトに悪口を言つな……」

「くくくっ……どうした? 《這い寄る混沌》」

「うっ……ぼ、僕をその名で呼ぶな……」

ぞわり。

「はあ……はあ……」

ぞわり。

《黒猫》ナイアーラ・トテップ。

魔術協会の使い魔。

錬金術により生まれ、
練成された^{ホームクルス}人造精霊。

闇を司る精霊。

闇の人造精霊である。
ホムンクルス

「這い寄る混沌」

ぞわり。

黒猫ナイアの体が霞んでいく。

「暗黒の猫」

ぞわり。

黒猫の額から眼が開かれる。三眼の黄金の猫目。

「燃える三眼」

ぞわり。

「闇に棲むもの」

ぞぞぞぞぞぞ。

ぞぶ。ぞぶ。

さらに、闇に同化するように影とその黒い体が霞んでいく。

『ソの名で僕ヲ呼ぶナ……』

闇の中に光る三眼。三つの黄金の猫目。

闇。闇。闇。

「闇の使者」

そして。もはや闇そのものになったナイア。

『ルルルルルウ……』

闇が吼える。

「闇に吠ゆるもの」

『ルルルルルウ……。ソノ名ヲ呼ブナ!!』

「くくつ……。ほおら、本性を現したな。ナイアーラ・トテップ。

《這い寄る混沌》!!!!」

白き蛇が嘲笑する。

『エウリュアレ・グライア!!……。ウツ?!』

どげし。

「だめー!!! ナイアだめなの!!!」

どげし。どげし。

なんと、なんと黒い少女がその闇のモノに向かって脚蹴りしていた。

「だめ、だめ。悪い子だめなの!!」

げしげしげし。

『・・・・・・・・ナ・・・・ナコト?』

その闇が凝縮されて元の黒猫の姿に戻っていた。

げしげしげし。

「痛い、痛いつて・・・・ナ、ナコト。ごめん・・・・。」ごめん

黒猫が元に戻っても、尚も蹴り続けている少女ナコト。

「ねえ・・・・もう大丈夫だから・・・・ナコト」

「・・・・悪い子は許さないんだから」

「はい、・・・・・・・・ごめんなさい」

仁王立ちでぷりぷり怒っている少女。

「このガキが・・・・あの闇化を正気ダークネスに戻しただと?」

白蛇がぎりりと憎らしそうに少女を睨んでいる。

「もういい、もういいから。」

止めなさい、エリユ」

「・・・リンネ？」

安楽椅子にもたれていた白き少女、草薙リンネは、立ち上がって白い蛇を抱きかかえた。

「お、おい・・・、むっ」

「・・・ありがとう。」

もう、いいんだ。

君が私のことを心配してくれてるのは分かっているから」

「し、知るか・・・」

優しく白く細い手でふてくされた白蛇を撫でながら、白い少女は囁いた。

白き蛇。《白蛇》エリュ。

水の人造精霊^{ホムンクルス}エウリュアレ・グライア。

闇の人造精霊《黒猫》ナイアと同じく。

《白銀》の錬金術師ヘルメス・パラケルススが練成した人造精霊^{ホムンクルシ}の一体。

かつて魔術協会の使い魔であったが、今は、彼自身の独断で白き魔女、草薙リンネの使い魔をしている。

「ナイア。ナコト。」

エリュが迷惑をかけたようだね、・・・すまない」

リンネは、少女と黒猫に頭を下げる。

「ああ、ああ。

どうか・・・頭を上げてください、リンネ様。

ぼ、僕が・・・その、まだ未熟なもので・・・面目ないです・・・」

「リンネ、リンネーきれー。きれい」

場の空気を読んでいないのか、読めないのか。ナコトがリンネの頭を髪を撫でている。

「ちょ、ちょっと、ナコトでは！リンネ様に失礼でしょ？」

「いいでしょー、ちょっとくらい触っても」

「だめだよ、失礼だってば」

「むーむー」

くすくす。

「あはは。いいんだ、いいんだよ。ナイア」

白き少女リンネが微笑んでいる。まるで白い天使のように。

久しぶりに見たリンネの笑顔。

美しい。綺麗だ。

リンネに抱かれている白き蛇は、リンネのその笑顔をずっと眺めていた。

くすくす。

あの時。

《魔女戦争》後に。

《魔術協会》を去ってから、ずっと寄り添っていたはずなのに。

俺は、この笑顔が見たかったのか。そう見たかったんだ。

いままでも。そして、これからも。

あの時。

《魔女戦争》後に。

《魔術協会》を共に抜けた時に、誓ったんだ。

ホームクルス

人造精霊の創造主たる、稀代の錬金術師ヘルメス・パラケルススにも誓ったんだ。

生涯。白き魔女と共に居る事を。

生涯。草薙リンネの使い魔でいることを。

生涯。草薙リンネをこの身を賭しても守ることを。

くすくす。

白き魔女が微笑んでいる。

この優しき白い少女の笑顔を守る為なら。

俺は喜んで、蛇となり、邪となろう・・。

あの時。あの場所で。

俺は、この白い少女に、そう誓ったんだ。

第二十五話「撲殺天使」

黒衣の男が高層ビルを見上げていた。

短いボサボサの金髪。

耳には、幾つもの銀のピアス。腕には銀のブレスレット。指には、銀色の指輪。首には、銀のネックレス。

ゆらゆらと灰色の煙草の煙が揺れる。

その蒼い瞳は、まるで猛獣のようのように鋭い。

《再殺部隊》壱番隊の再殺者。

犬塚アギトである。

蒼い浄化の炎を操ることから《鬼火》と呼ばれ、恐れられている。

屍への復讐に燃える、炎の獵犬。

咎を持つ走狗、炎の咎狗である。

「ここか」

犬塚アギトは黒いコートの内ポケットから、黒くコーティングされた携帯電話を取り出した。

東条機関に所属する再殺者は皆、犬塚アギトがそうされたように脳

内にICチップが埋め込まれている。

東条機関のメインコンピュータである《バビロン》により居場所を把握され、生命維持情報などを管理、モニタリングする為である。（再殺者自体が危険な存在である為の監視でもある）

犬塚アギトの持つ携帯電話には、それと同じ機能を備えたアプリが入っていた。

東条機関技術開発室の室長。天才児、江神リヒトは彼らの脳に埋め込まれたICチップを解析し、一晩でそのアプリを作り上げていた。

愛しい妹のあいくるしい待ち受け画像に心を和ませることなく、アギトは江神リヒトの作った『ジオラマバビロン』と名付けられたアプリを起動した。

アプリは東条機関のメインコンピュータのように、各再殺者の詳細な情報を得ることはできず、ただ場所を特定することしかできないが、GPSなどで再殺者たちの居場所がわかるようになっていた。

この特殊携帯は、《再殺部隊》隊長クラスの再殺者に配られる。

起動した『ジオラマバビロン』にはこの地域周辺の地図が浮かび上がっていた。

画面内の建物が光っている、ここが指定された孔雀教団の支部があるビルなのだろう。

青い光点が2つ。アプリなので詳しいシリアルナンバーは書かれて

いない。

アギトの他に再殺者がひとり存在しているということになる。

「んー、こいつが隊長がいった奴だな。・・・あん？」

向かいの高層ビルの横の電柱に怪しげな物体が見えた。

「ん？・・・まさか、なあ・・・」

アギトが見る視界には。

猫耳が見える。

ぴよこぴよこ。

尻尾が見える。

ふりふり。

「ああ・・・」

あれで隠れているつもりなのだろうか。

アギトの目の前には電柱からビルを覗いている少女がいた。

「あちゃー。・・・よりによってあいつかよ」

はあ、とアギトは頭を抱えていた。

隊長が選んだ仲間。俺の相棒とはアイツのことだったのだ。

「マジかよ……」

その少女は、頭に猫耳のアクセサリをつけていて、フリフリなミニスカートには猫の尻尾のアクセサリが付いている。

茶色の髪のスィンテールの小さな可愛い少女だった。

「にゃ。にゃ。」

隠れているつもりなのか、にゃあにゃあ鳴いている少女の名は。

猫堂院キリン。

なんと、この猫耳少女は、東条機関《再殺部隊》参番隊の再殺者なのである。

冗談じゃなく。コスプレ好きだけじゃなく。

ぶかぶかの再殺部隊専用の黒いコートの腕章には「参」の文字。

とても可愛いのだが、見た目はまさに小学生。

赤いランドセルが良く似合うであろうその姿。容姿体型。幼児体系。

「にゃ。遅いよ、遅い!! もー、待ちくたびれちゃったよー。」

アギトがどうしてもつ、て言うからさ、来てあげたのにー」

キリンが愚痴をこぼしているところ、そり後ろから近づく影。

「おいコラ、だーれーがー。そんなこと言っただ？この猫女」

ぐりぐりとツインテールの頭を小突く。

「うにゃ、……ア、アギト?!……居たのー?」

「居たのー、じゃねーよ。このバカ。

さつきからそこにいたんだよ、ってかお前。全然隠れられてねーし、バレバレだぞ?」

「にゃにゃ、キリンは完璧だよう?にしし。」

ヒュージョン!!、などと言いながらキリンは電柱に同化しようと抱きついている。

「ああ、そーかよ……はあ」

猫のコスプレをした少女が電柱に抱きついて、こちらを向いてピースサインをしていた。

アギトは目頭を指で押さえた。

ああ、頭痛い……。他人の振り、他人の振り。

っていう訳にはいかないよな……。はあ。

なんてアギトが考えている間に、キリンは電柱からアギトに抱きついている。

「……おい、キリン」

「なんにゃ、アギト」

「・・・うざいから抱きつくな」

アギトは少女を引き離そうとしている。

「・・・ひ、ひどい。愛してるって言ったのに。うつうつ・・・」

キリンは、そう言っただけ泣きながら涙や鼻水をアギトに擦り付けている。

「や、やめろって！わ、汚ねーな、・・・ってか、愛してるなんて言っただけよ！」

「嘘つき・・・ひぐっ、ひぐっ」

ぎりぎり。

「ぐっ・・・がっ・・・ま、待て。キリン」

抱き締めたまま。キリンがアギトの体を締め付ける。まさにベアハツグ。

みしみし。

「ま、待て・・・。わ、分かった・・・から、離せ・・・」

自分の骨の軋みが聞こえるのが分かる。

ぎぎぎぎり。みしみしし。

「た、頼む・・・から・・・」

「・・・うにや、アギト？キリンはハグしてるだけだよ？」

万力のように締める少女の細い腕から、ようやく解放された。

「はあ、はあ・・・頼むから、その馬鹿力を俺に使うのやめろよ・・・怪力女」

「うにゅ．．．ごめんじゃ」

怪力。剛力。

少女の細い腕から、想像もできない人並み外れた筋力、腕力を持つ。

超人的な身体能力を持つ少女。

《怪力乱神》の再殺者。猫堂院キリン。

その怪力の拳（キリンが言うには、猫パンチ）で、屍を粉碎することから《撲殺天使》とも呼ばれる撲殺少女。

戦闘能力だけを取れば再殺部隊一ではないだろうか。

再殺の呪い。

力の呪い。

強力、怪力の再殺能力。

呪われし力の咎狗。

「うー、ハグしてるだけなのにや．．．」

少し悲しそうにツインテールを指で弄っているキリン。

「うう．．．キリンはこんな馬鹿力だから．．．嫌いなんだね．．．ひっく」

また泣き始めるキリン。

「わかった、わかった……。あー、もー。そんな顔するなって、泣くなつて……」

アギトは、なでなでと、猫耳少女の頭を撫でる。

「じゃあ……。嫌わない？」

耳をぴくぴく。上目使いでアギトを見る可憐な少女。

「うつ……。き、嫌わないから……。な？」

危ない。危ない。一瞬ドキツとした自分が危ない。

「えへへー、良かった。アギト好きにや」

「わっ……。バカ」

再び抱き付こうとした少女をアギトは避ける。

「お前、さっきのワザとだろ？」

「えへっ」

キリンは、ペロリと舌を出して笑っていた。

「……。ったく」

ほんと。こいつといると調子が狂わされる。

ぐるぐる。

ぐるぐる廻る視界。

なあ、どうして。そんな楽しそうに笑えるんだ？

お前も再殺者だろ？

俺と同じように、咎を持つ者なんだぞ？

その小さな身にも呪いが、俺たちは呪われている。

呪われた化物なんだ。

それなのに、それなのに……。どうして。

俺は……。俺は笑いたくないんだ。

もう笑えないんだ。

お前は、どうして、そんなに笑えるんだ？

お願いだ。

そんなに構わないでくれよ。

なあ、頼むから、俺に近寄るな……。

俺も。

お前のように、楽しそうに笑ってしまっじゃないか。

サクヤ。

なあ、サクヤ。

お前も笑っているのか。

そんなふうに楽しそうに笑っているのか。

ああ・・・、そうだな、サクヤ。

俺にはそんな資格はなかったな。

この手が。呪われたこの手が。

この手には、サクヤの小さな頭がある。

なあ、サクヤ。

この手には、少女の細い首の感触。

今にも、折れそうな白くて細い首を。

ぎりぎり。

俺の汚れた手で掴んでいる。

ぎりぎり。

締めている。

あ・・・あつ・・・。

苦しいのか、サクヤ。

泣いているのか？サクヤ。

『いいの。いいんだよ。お兄ちゃん』

ぎりぎり。

サクヤは、笑っていた。

ぎりぎり。

『いいの。いいんだよ。アギトになら・・・』

ぎりぎり。

キリンは笑っていた。

「はっ、・・・サクヤ?!・・・キリン!!」

キリンの首を締めていた手を解いた。

「げほっ・・・ごほっ・・・」

キリンが苦しそうに息を乱している。

「・・・すまない、キリン。俺は・・・また・・・」

自分の手を呆然と眺めながらアギトは膝から崩れ落ちている。

「ごほっ・・・ううん、い、いいんだよ。・・・アギト、大丈夫だからね・・・」

ふわり、と。

アギトを優しく抱き締める少女。

「もう大丈夫だから」

万力のような怪力ではなく。小さな子供を抱くような抱擁である。

「ああ・・・もう大丈夫だ」

「うん」

ふわりと。麒麟の髪がアギトの顔に触れる。

麒麟は優しい甘い匂いがした。そうか、この匂い・・・少しサクヤに似てるな。

もう少しこのまま・・・。

膝から崩れている少年を、優しく抱き締めている少女。

ははっ、これじゃ。どちらが子供なのか分からないな・・・。

こりゃ、・・・笑える。

犬塚アギトの啜えていた煙草が口元から、頬を伝わる涙と共にぽとりと堕ちた。

第二十六話「高野聖」

あつ、ああ・・・

うつつ・・・

闇に木霊する女の喘ぎ声。

がしやがしやと響く鉄格子の音。

闇の中に男と女。

檻の中に男。

檻の外に女。

鉄格子の檻。

牢獄。

そこは。どこか地下の牢獄であろうか。

地下牢。

辺りは蠟燭の明かりもない。灰暗い闇である。

ただ岩だけがみっしりと詰まっている。

闇の中に木霊する女の声。

男は檻の中、鉄格子の間から手を伸ばして悶えている女の身体を触っている。

「あつ・・・天戒様、いけません」

そういいながらも女は檻を離れない。むしろ自ら身体を鉄格子に寄せている。

「なにがいけないんだ？」

天戒と呼ばれた男は裸であつた。

ボサボサの長い金髪に不精髭の顔。その魅力的な顔立ち。

細くはあるが引き締まった隆々たるその身体は、まるで彫像の如き美しさである。

その彫像のような手が女の乳房を掴む。

「あつ・・・くつ・・・天戒さ・・・まあ」

男の手が触れるたびに女が悶えている。

女。

まだ幼さが残る童顔の女。

ただ女は禿頭である。

尼。

悶えている女は、法衣を着た尼である。

比丘尼。

尼僧。

その乱れた僧衣から覗くなまめかしい白い肌が汗で滑っている。

しゃん。

しゃん。

闇の中に響く音。

しゃん。

しゃん。

その音が近づいてくる。

「ん？」

天戒と呼ばれている男が眉をひそめた。

「あつ……天戒様？」

男の手が止まったので女は呟いた。

「……この錫杖の音は……あいつか」

そう言いながらも、男は女の豊満な乳房を強く掴んだ。

「ああつ……」

女の声が高まる。

しゃん。

錫状の音が止まった。

「いいかげんにして下さい・・・天戒さん」

静かな声が響く。

闇の中に錫状を持つひとりの僧侶が現れた。

僧衣を着た禿頭の美貌の僧である。

「ふん・・・虚空か、なにしに来た？」

虚空と呼ばれた僧は静かに呟く。

「・・・・・・・・大僧正様がお呼びです」

「けっ、今更。あのじじいが、俺に？」

忌々しそくに唾を吐き棄てる天戒。

「あ・・・あの、虚空様・・・わ、私・・・」

女は慌てて乱れた僧衣を直しながら、やって来たその男、虚空を見る。

「もういいから。貴女は、戻りなさい。」

それに・・・。

ここは女人禁制なのですよ。分かっていますね？」

「・・・はい。申し訳ありません」

優しい静かな声だが、その中に含まれる意味を女は理解していた。

「あーあ、折角これからいいとこだっというのによ」

天戒が呟くと同時に、そそくさと女は闇に消えた。

「・・・いい加減にして下さい。」

独房でそんなことなど・・・、許されないのですよ？」

「別に、いーじゃねーか」

「だめです」

「けっ、この糞坊主」

「むっ・・・僕は糞坊主なんかじゃありませんから、

それに、貴方のような生臭坊主に言われる筋合いなどありませんよ」

虚空の美貌が歪む。

「なんだと、虚空。おまえなあ」

こほん・・・、とひとつ咳払い。

「・・・兎に角、来て下さい。」

慈海大僧正が呼びなのです。

高野《九曜星》がひとり、《破戒僧》天戒さん」

高野。

霊峰。

高野山。

真言宗。真言密教の総本山。

真言宗の開祖。弘法大師空海が入定（生きながら木乃伊となり）し、
今も瞑想している霊峰。

高野山金剛峰寺。

高野山真言宗総本山の寺院。

ここは、その金剛峰寺の地下にある独房。

この男。天戒が幽閉されている場所である。

高野《九曜星》とは。

法力、法術などの密教術を操る高野山の実力者。その中でも最強の
術者たち。九人の真言密教僧たちのことである。

独房に幽閉されていた金髪の男。

《九曜星》のひとり。破戒僧、天戒。

禿頭の美貌の青年。

《九曜星》のひとりであり、九曜筆頭を務める、高野山の若き少僧正。

その若さで密教術の全てを習得した、大師空海の生まれ変わりと噂されている天才真言密教僧、虚空。

「じじいが、俺たち《九曜》を呼ぶってことは」

「ええ」

「途轍もない何かが起こっているな」

「ええ、だから貴方を解放するんです」

「ふん。虚空。なにが起こっている？」

「……怪異です」

「怪異だと？」

「そんなもの他のやつらにでもやらせりゃいいだろうが」

「それが、もし。」

世を揺るがす大いなる怪異であり、世を滅ぼす大いなる災厄だとしたらどうです？」

「なに！？」

「それに・・・」

「それに、なんだ？」

「屍の姫君。」

黄泉返し幽宮の使者。大いなる災禍たる十二人の屍姫が現れたと
したら？」

「ほう、屍姫。・・・十二屍徒か」

「どうです？天戒さん」

「なにがだ？」

「それでも、まだ貴方はここで女性と楽しんでいますか？」

「ふん、そんなこと決まってる」

「ええ」

「そんなおもしろーこと、ほっておけるかよ」

「ふふ、そう云うだろうと思っていましたよ」

「けっ、うるせー。」

いくぞ、虚空。あの糞じじいのところによ」

「あ・・・・・・・・」

「なんだあ？早くいくぞ」

「その前に……服を着てください」

「ん？」

「はははっ、すまんすまん。それもそうだなあ」

虚空は、持ってきた黒染の袈裟を天戒に渡しながら。

「それと……天戒さん」

金髪の怪僧に呟いた。

「……なんだよ、虚空。まだ何かあるのか？」

天戒は、黒い法衣に袖を通しながら虚空に問いかけた。

「高野を去ったあの人、……邪空のことです」

「邪空だと！！あいつがどうした？！」

「ええ。」

彼が、現れたとの情報がありました」

「邪空……」

ぎりぎりと歯を噛み締める破戒僧、天戒。

「彼は……誰よりも僕らを、高野を愛していた師兄でした。」

だが、僕を、僕ら高野山を裏切った背信僧。

高野の権中僧正であり、元九曜星筆頭、聖空。

高野の最秘典、大師様の秘法を盗んだ外道僧。

そう今は名を変え、・・・魔道に。外道に堕ちた外法師。

名を邪空と・・・」

「ああ、あいつは、あいつだけは赦さねえ」
どしんと、固めた拳を岩の壁に叩きつける。

その一撃で。

ぱらぱらと、石が振り、ぐらぐらと岩の牢獄が揺れた。

「虚空！」

「はい」

「で、あいつはどこに居るんだ」

「はい、彼が目撃されたのは・・・、

屍の巣窟。

人外の魔京。

怪異の蔓延る都。

大いなる災厄《魔震》の起こりし魔都《神戸》です」

そう言いつと高野山が誇る美貌の天才密教僧、虚空の美しい眉を少し歪めながら、その美しい黒瞳は、牢獄の天井を。灰暗い闇の空を。その虚ろな眼差しで、虚空を視ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6861h/>

再殺少女ゾンビ《罪と罰》

2011年11月15日00時17分発行